

特 231

965

養老



東京養老院概要



0039863000

0039863-000

特 231-965

養老

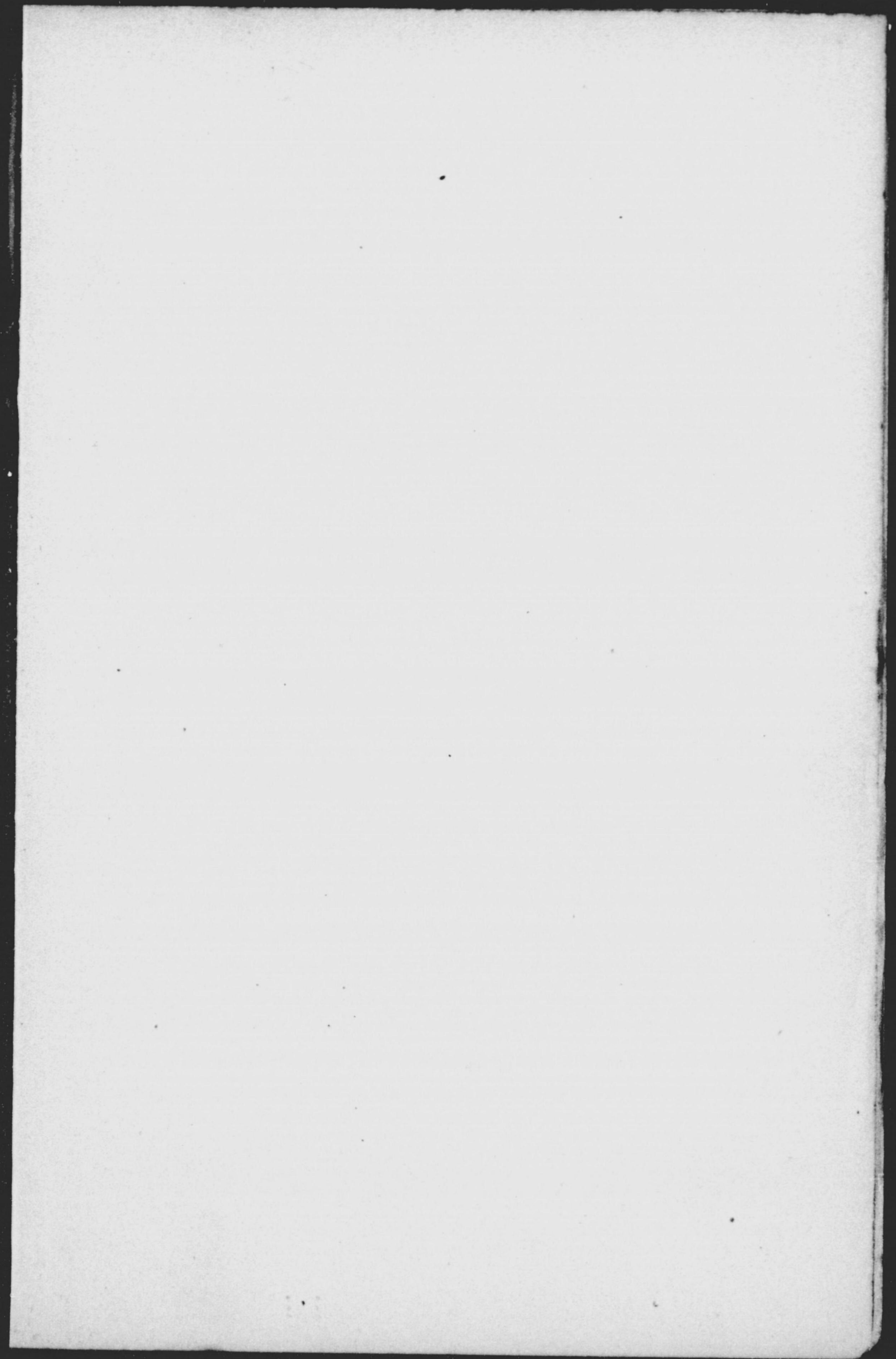
東京養老院

昭和 13

AGI

特231

965



明治天皇御製

をさな子にひとしくなれる老人おいびとを

いたはることをゆるがせにすな

さまぐの事にあひにし老人おいびとの

むかし語りぞ身にはしみぬる

昭憲皇太后御歌

つく杖にすがるともよし老人おいびとの

千歳ちとせの坂をこえよとぞおもふ

散る花こぼれの梢こぎすはおきて春さむき

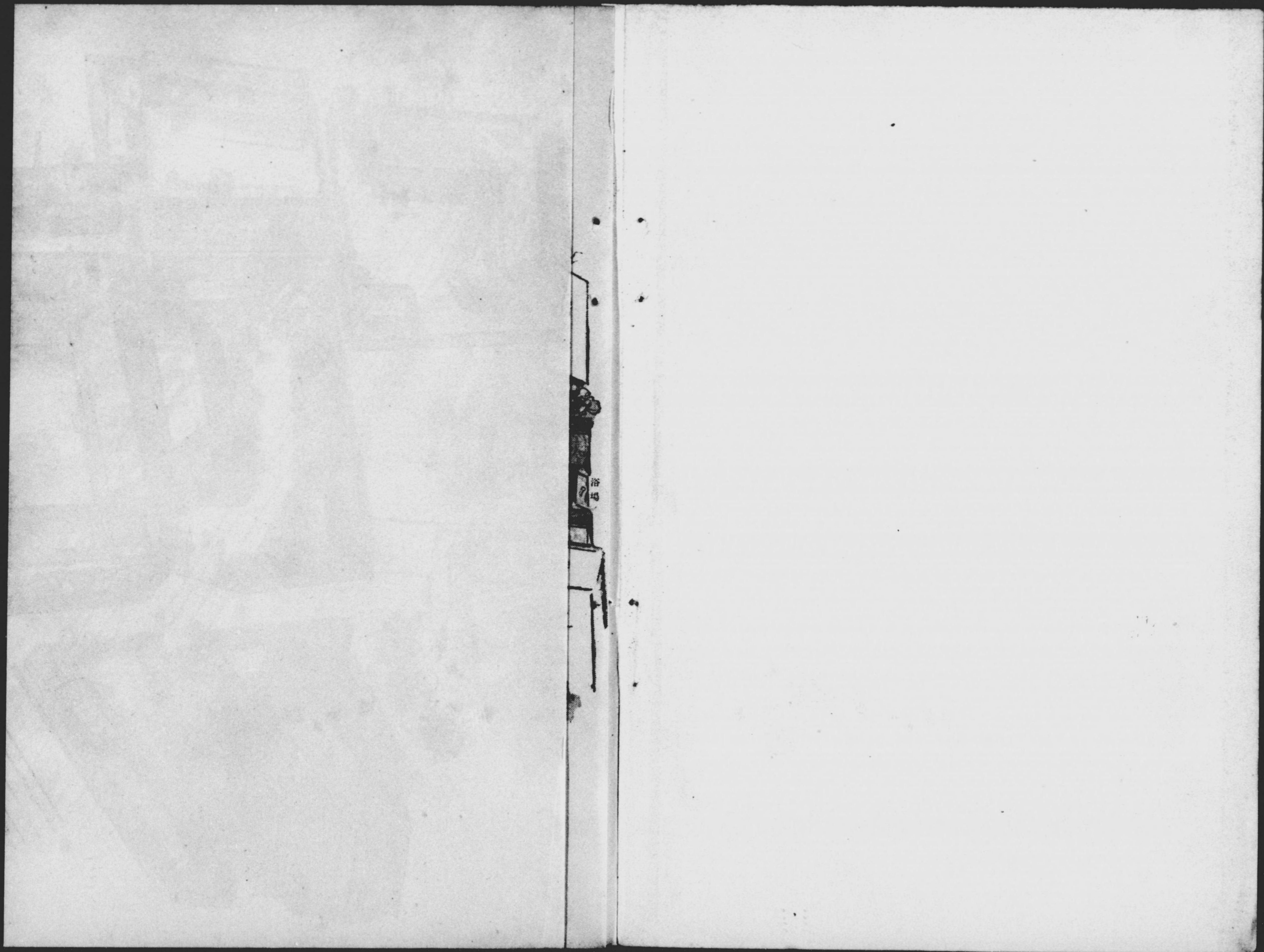
風をぞいとふおい人のため

和顏愛語

和顏愛語

增上寺三木老衲書







東 京 養 老 院 正 門

はしがき



はしがき

十年一昔と申しますが、確かにその通りで、人間も十年たつた跡をゆりかへてみますと、自分ながら驚くほどの変化を感じるのが常であります。ましてそれが三十年となりますと、今年生れたばかりの子供が立派に一人前の人間となつて、或ひは人の父となり、或ひは大の魁となつて、獨立獨歩この世を渡つて行く年輩となるのでありますから、その間の変化もまた非常なものだと申さねばなりません。この三十年間を一代と申して、人間社會の變化の尺度とすることにも理由がないとは思はれません。申すまでもなく、この世の中はさうした人間の集まりであり、隨てこの世の中に於ける事々物々の變化は、主としてさうした人間の變化と併行して行は



れるものゝやうに思はれます。そこで如何なる事業にいたしましたも、この三十年といふ事業そのものにとつての成長期間を經過した上でなくては、その事業の將來を判断することは不可能であらうと思はれます。

ところで、我が東京養老院は、幸ひにしてその重大なる期間を無事経過し、こゝに創立三十五周年をむかへることゝなり、吾々當事者といたしましては、實に喜びにたへない次第であります。これ偏へに一般同情者の御援助の賜として感謝の念禁する能はざるところであります。

かういふ次第で、本院も人間で申せば一人前となつたのでありますから、その過去の經驗を土台として、今後ますます奮勵努力して國家社會に對する報恩の萬分の一をつくさねばならぬこと勿論であ

ります。しかしながら、ひるがへつて考へますに、本院創立の當初と比較して、本事業に對する一般の理解には非常な變化、否、非常な進歩を來したことは否定すべくもない事實でありまして、彼の救護法の實施の如き、それがよき適例であると申すほかありません。随つて今後に於ける吾々の活動は、さうした一般の理解と相まつて非常に容易な道程を辿り得るやうにも思はれますが、しかし、それにも拘はらず、一般世間に於きましたは、今猶養老事業の何たるかを十分には理解せず、随つて本院の實狀につきましても餘り多くを知らない向きが可なり多數であることは、本事業の將來に對して尠なからざる障礙であると申さねばなりません。

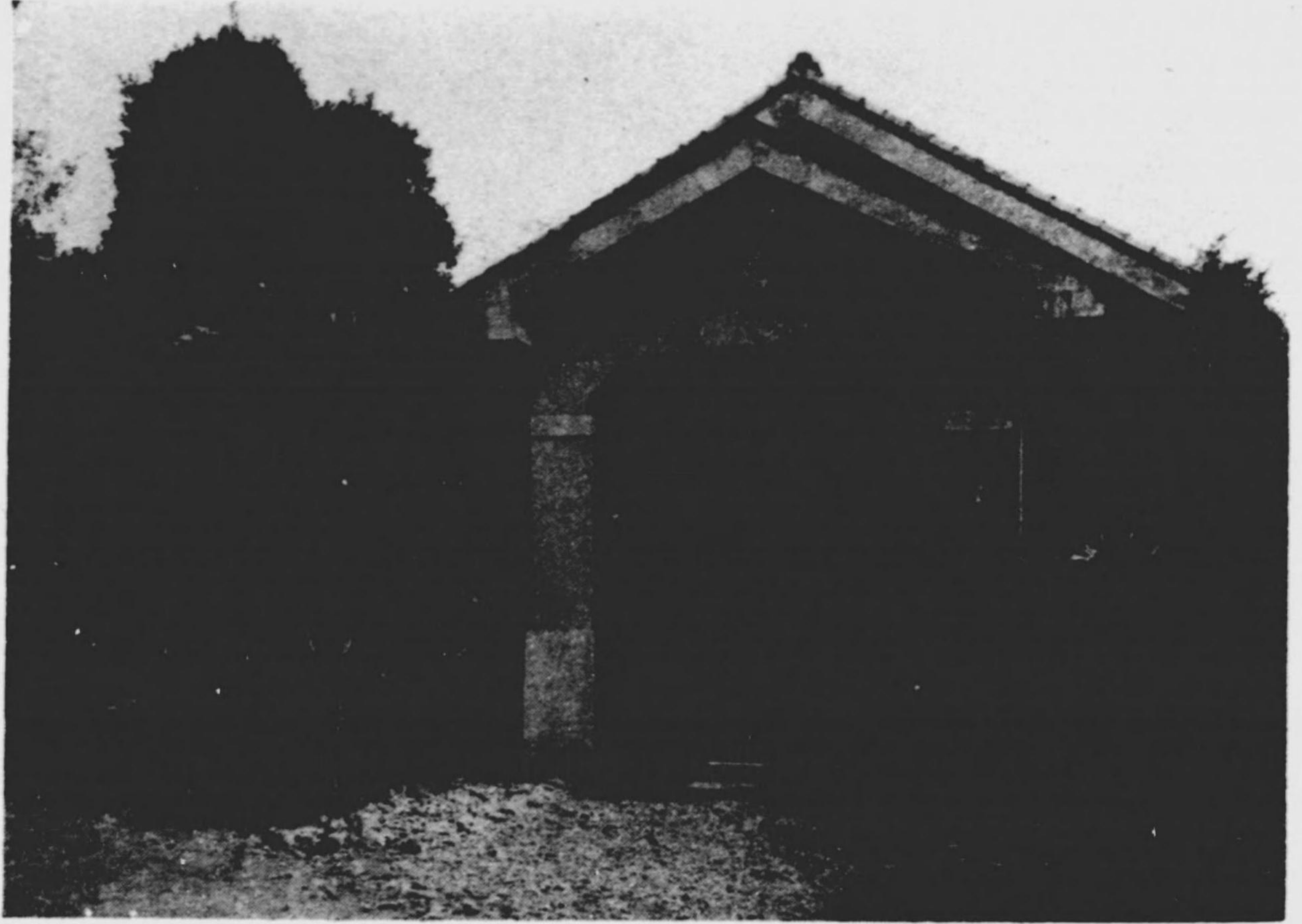
本來から申しますと、こゝに本院創立三十五周年をむかへますに當り、一般同情者への報告並に感謝の意を表するため、何らかの形

に於いて、記念祝典の如きものを催すべきであります。時恰も事
變中の事でありますので、さうした催しは一切これをとりやめとし、
それに代ふるにこの小冊子を發刊し、これを記念として一般社會事
業關係者並に同情者に頒布して、ますく本事業に對する理解を深
めていたゞくと同時に、本院の内容につき御報告かたゞ御紹介申
し上げることになりました。何卒本院の意のあるところをおくみと
り下さいまして、この書御閲讀の上、倍舊の御指導と御援助を賜は
らんことを懇願する次第であります。

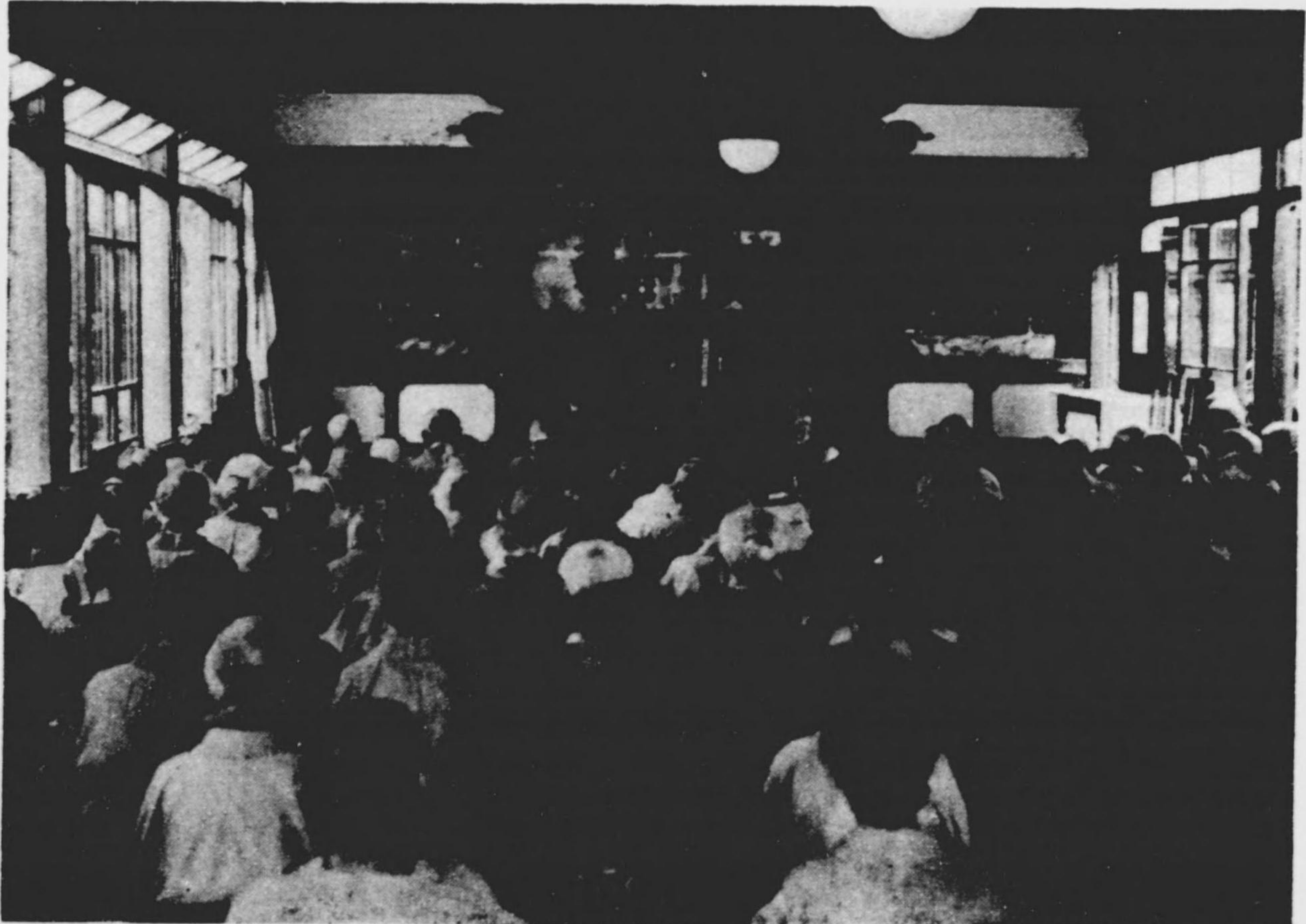
昭和十三年十一月

東京養老院常務理事

里見達雄



恩賜講堂

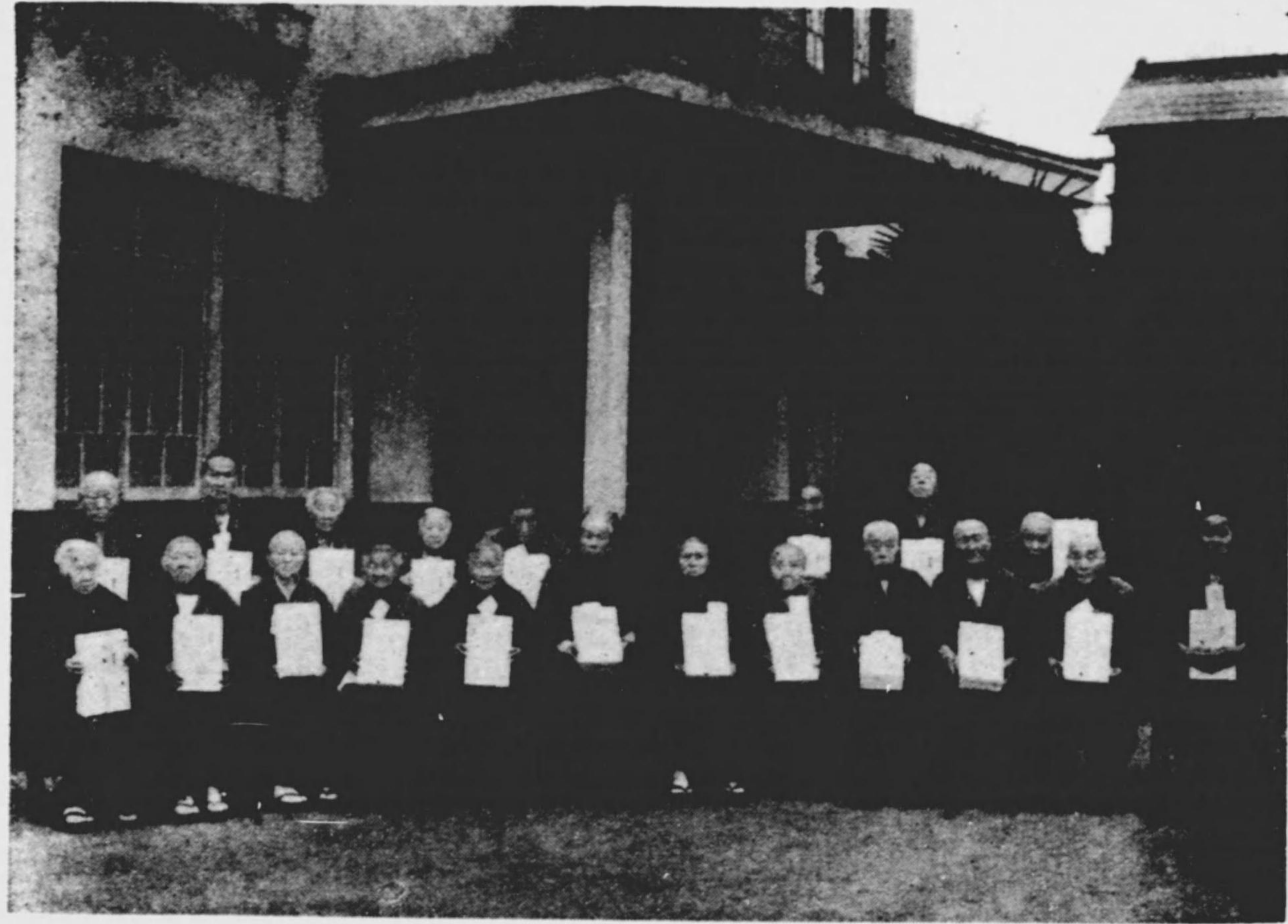


朝のおつとめ

附屬病院正門



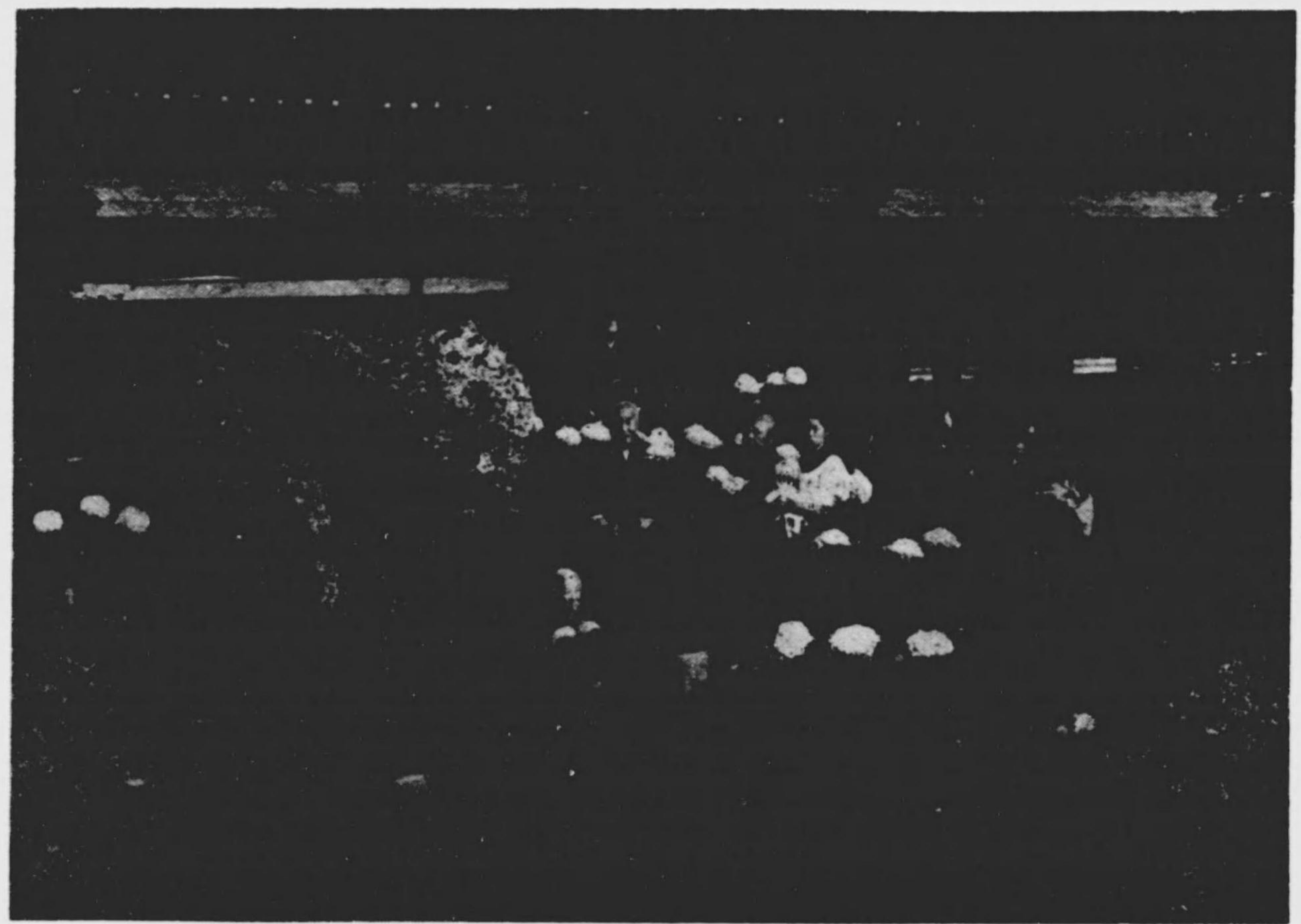
篤志家よりの記念品を受けた八十歳以上の老人



病室の一部



自分で作った菊に見入る老人たち





治療室

これは病院の治療室の實景で、今一人の老人が咽喉の治療を受けて居るところです。かうした病人が次々に待つてをります。

養老(東京養老院概要) 目次

表紙(畫)……………田中佐一郎
書……………大島徹水

明治天皇御製
昭憲皇太后御歌

題辭……………大島徹水

東京養老院鳥瞰圖

はしがき……………里見達雄

和顔愛語……………大島徹水

本院の使命……………木村玄俊

本院創立三十五周年を迎へて……………東京養老院理事會長岡本貫玉…二〇

東京養老院理事會長岡本貫玉

養老院とは何か……………三

東京養老院の目的……………九

本院の沿革……………三二

本院の施設及び組織……………六

一、設 備……………九

二、役員並に職員……………三二

入 院 手 續……………四

院 内 の 生 活……………六

一、在院者の職業及び年齢……………六

東京養老院「見たまゝの記」……………五九

一、朝の「おつとめ」……………五九

二、恩賜講堂……………六四

三、明るい集團寮……………六六

二、在院者の日常生活……………三七
三、在院者の慰安……………四〇
四、在院者の健康状態……………四三
維 持 方 法……………四七

財團法人東京養老院寄附行爲……………五一

財團法人東京養老院役員名録……………五九

四、行届いた大救護部……………六

五、理髮屋さんの奉仕……………七

六、老人のたのしみ……………七

七、平和な家庭寮……………六

八、完備した病院……………七

九、事變後の動き……………八

一〇、老人は語る……………八

その一……………八

その二……………九

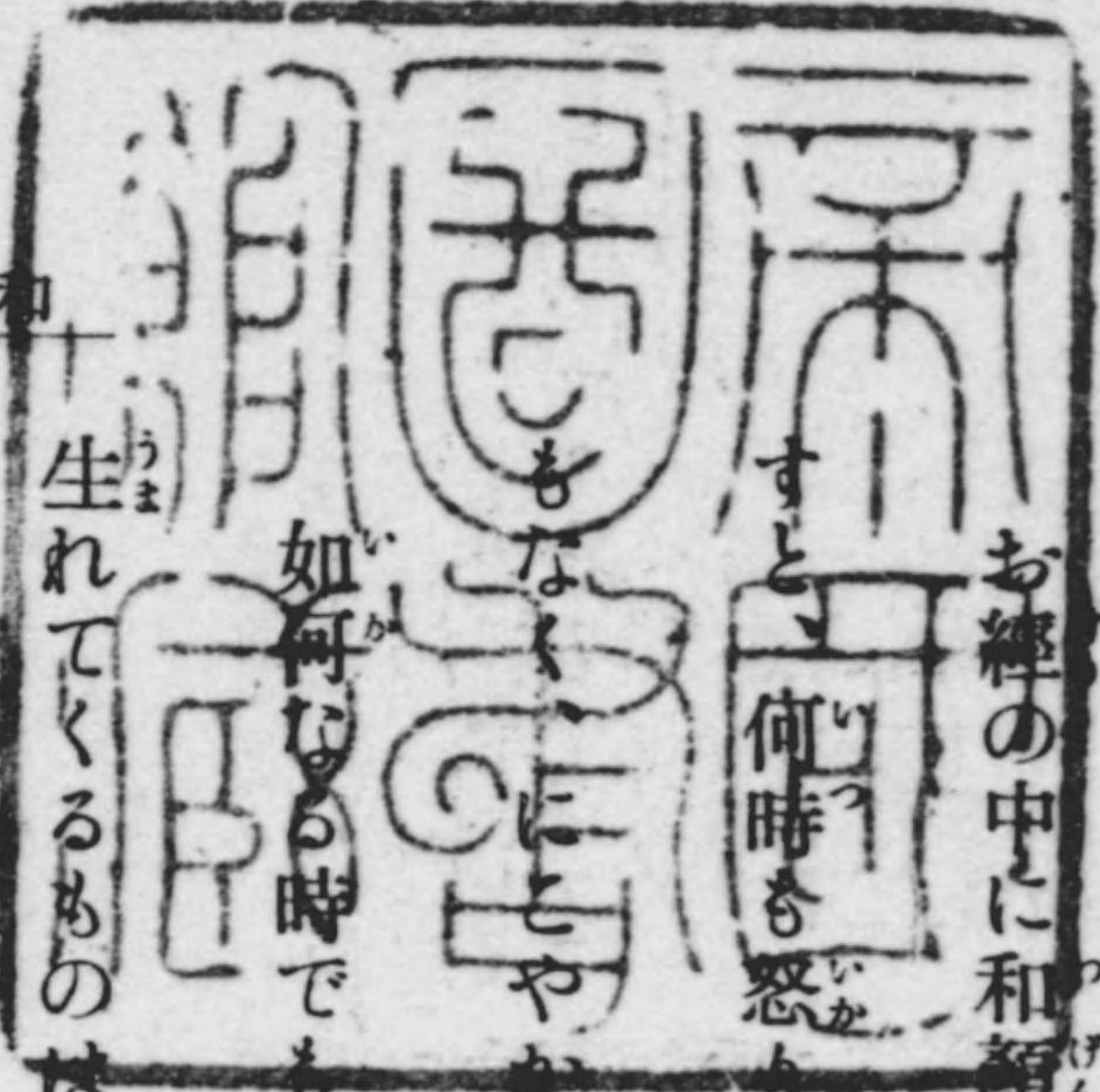
その三……………九

感想……………一〇

跋に代へて……………東京養老院理事 兼 法律顧問 川瀬專之助 一〇三

和顔愛語

東京養老院長 大島徹水



お緯の中に和顔愛語と云ふお言葉があります。私達の日常生活を考へて見ますと、何時も怒りごとにくしみとに満ちた日が多く續いて居ります。心に一つの不安もなく、何処でも、さうした内省の氣持ちでありたいと思ひつゝ、何時も如何なる時でも何處でも、さうした内省の氣持ちでありたいと思ひつゝ、何時も生れてくるものはその反對の不平不満、何かしら不足の日常のみであります。

然しお互は出来るだけ人に對してにこやかな顔で相手になり、怒りを含まない顔色と言葉で話し合ふことが何よりも大切であります。心の中に何時でもお念佛を申

して居ることが出来れば人に對する態度もやはらかになり、み佛様の御旨の幾分でも持ち行ふことになることは、どれ程み佛様をお喜ばせ申すことになるか知れない。私共はいつも阿彌陀様や法然様を泣かせてはいけない。私たちが口を動かして懸命になつて唱名してゆく所に無碍の大道が拓かれて行き、やがてはみ佛様にも法然様にも喜んでいたゞけるのではないかと存じます。

人はお互に他の人を敬しなくてはいけない。他を敬する所に和顔愛語が生れる。こゝに一家の平和、一村一國の和平が生れてくる。それを他を敬せずして自分だけ敬せられようとするところに無理が出てくる。自分には微笑がなくて人にだけ和顔であれと言ふことは間違つて居ります。一切の煩惱の氷がみ佛様の本願心の 温い光明に接して 悉くとけるやうに、養老院に在住の二百人餘りの收容者の上にも

世間の人々の温い心に依つて、永劫の僻みの心がとけて喜びとならねばいけない。私たちは收容者を收容者として取扱ふよりも、出来るだけ私たちの同胞者であり、同信同行者であると云ふ立場で接して行きたい。お互が禮を述べ合ひ合掌しつゝ生きて行けるやうにあらしめたい。オレがと云ふ我があつては合掌は生れて來ない。合掌する世界には與へる者と與へられる者と云ふ對立はないはずで、こゝに柔和があり、タカブリがない。一方に與へたと云ふ考へを持つと、友とか同信とか云ふ考へが薄らいでくる。私たちが心から和顔愛語を欲し合ふなら、今迄申し上げた心持ちで念佛の中から進んで行つてもらひたいと存じます。

何うかみ佛のみ姿を皆様方の心の上に持ち、み佛様の心を各位が深く心の上に刻つけて一家同胞の上になかして下さることをお願い申し上げます。

本院の使命

東京養老院理事長 木村玄俊

佛教では四恩と云ふことを申しますが、これは『心地観經』の第二卷「報恩品」の中に説いてあります。私共日本國民としての解釋では、日本國に生活するに當つて、第一には 天皇陛下の御恩、第二に父母の御恩、第三に衆生の御恩、第四に三寶の御恩を蒙るものであると説いてゐるのであります。そこで第一の 天皇陛下の御恩とは、申すまでもなく廣大無邊のものであつて、恐れ多くも 陛下におかせられては、我等國民をして豊樂安穩ならしめる爲めに日夜御宸襟を惱まし給ふのでありますから、其の御恩は實に海よりも深く山よりも高きものであることは、今

更茲に申上げる迄もなく皆様御承知の通りであります。そこで第二の父母の恩については、吾々は両親から生れたのでありますから、所謂父に慈恩あり、母に悲恩あつて、お經に依りますと、父母長養の恩は普天に漲り憐愍の徳廣大にして比なし云々とあります。殊に悲母十徳の恩を示し、容易に説き盡すことが出来ないと言つてをります。次に衆生の恩とは、一切の衆生は無始の昔より今日に至るまで百千劫を流轉してゐるわけで、たとひそれが他人であつても多生の中に於て或は自分の父であり母であつたかも知れない、即ち宗教的見地からみると、衆生は互に父母となつてゐるわけでありますから、すべての男子は我が慈父であり、一切の女人は我が悲母であるべきであります。さういふわけで吾々は一切の衆生に大恩を蒙つてゐるのであります。そして最後の三寶の恩といふのは、す

なほち佛、法、僧の恩でありまして、この三つはよく衆生を利樂して迷をいでさせるもので、これまた非常に大きな恩であります。

以上は四恩についての極めて簡単な説明ではありますが、さて普通一般の考へから申しましても、父母からは吾々はこの一生を終るまで大恩を蒙つてゐることは誰しも感じてゐることでもあります。殊に各々の父母であり祖父母である老人といふものは、若いものにくらべると、長い間この世の中に生活して、おの／＼その家業をいとなみ、また國家社會に對しても勞苦を重ねた貴い經驗をもつ功勞者でありますので、その老人に對して敬意を表し、感謝の念をさ／＼げることがは當然なことであります。我が國に於ては、かしこくも御歴代の 天皇陛下が殊に老人に對して敬老の範を示させ給うたことは、特筆に値することでもあります。例へば 聖武天皇、光

明皇后が施藥院、療病院、敬田院を施設せられ、聖德太子が四天王寺に悲田院を創立せさせ給うたことは顯著なる實例であります。

かゝる次第で、敬老、養老と云ふことは、日本の國柄から申しまして、皇室を始めとして吾々の先輩の早くからなし來つたことでありますが、特に現時の社會に於いては、貧富の差が非常に甚しくなり、さらでだに人間には榮枯盛衰があつて、昨日までは相當にやつてゐた人も、不幸にして大厄にあひ又は事業に失敗したりして一朝にして不遇の地位に墮することがあるのであります。しかもさうした氣の毒な人々の中には、既に老境に達してゐながら子供がなかつたり、又は頼る可き人もないといふやうな所謂無告の老人が可なり多いのでありますが、それら不幸な人々をそのまゝに放任しておくこと云ふことは、特に佛敎者といたしまして、無縁の大慈悲

からそのまゝ放つておくことは出来ません、必ずや温かい手をさしのべて救済せざるを得ないのであります。

一步譲つて社會共同責任による共存共榮の立場から申しましても、それらの不幸な人々を收容救護する施設を完成して餘生を安樂にすごさせることは、社會政策上から言つて最も望ましいことなのであります。東京養老院は佛の大慈悲心よりして、それらの鰥寡孤獨である世の中の功勞者に對する救助の施設を創設してから本年を以て滿三十五年になるのであります。

顧りみますれば明治三十六年本院創立以來、不遇の老廢者救護を目的として、孜孜その事業を經營持續し來りましたゝめに、長くも宮内省の御下賜金を始め、内務省、東京府、警視廳、東京市、其他他公益事業助成團體より深厚なる御助成と御奨勵とを賜り、且つまた大方各位の御同情と御後援とにより、年を遂うてその規模を

擴大整備し、その内容を充實強化して、常に二百有餘の老廢者を收容救護し、本年九月末までの延人員數は百五十七萬一千五百有餘の多數に達してをります。現在のこの状態は、關係者一同の擧つて感激してゐるところであります。更に今時局の重大性に鑑みるに、本事業の興隆がやがて皇運扶翼の萬一に資する所以であり、且つ銃後施設にも該當するものであることを想ひ、こゝに時局下の本院はその陣容を一新し、三十五周年を一轉機として更生致したいと念願して居る次第であります。

茲に皆様によつて本院施設が實に我國の敬老尊祖同胞相愛の傳統的大精神の一表現であること並に時局に即應する銃後施設の一つであることを認識していただき、天涯孤獨、よるべなき老父母に對し、佛の慈悲心を心として、餘生を安樂に送らしむるを以て唯一無二の使命とする本院に對して、尙一層特別なる御後援を煩したいと考へてをる次第であります。

本院創立三十五周年を迎へて

東京養老院理事會々長 岡 本 貫 玉

財團法人東京養老院創立三十五周年を迎へるに際し、吾等關係者として創立以來の救恤同情者各位に對し深く感謝の意を表し、更に新なる同情者の救恤を乞ふ。

人世悲惨事多き中に老窮の良民にして犖獨倚る所なく、體力は減じ、氣力は衰へ生活の競争裡場からは排斥され、取つくべき職業なく、此儘に過ぎさば飢ゑて死せんか、罪を犯して生きんかの境目にあり、天我を殺さざる以上、天より授かりし命を全うせんとするは是れ人情なり。武士は喰はねど高楊枝といふことは昔語りとなりたる現代に於て、あはれ凡夫のあさましさに、連日食を得ずして路頭にさまよふ

老窮の人は、罪惡を犯すといふ觀念を越えて、唯單に飢を凌ぐといふ意志の下に罪惡を犯して、囹圄の人となるもの少なからず。實にあはれむべき實狀なり。然るに我國には古來より孝を獎め老を尙ぶの美風あり。畏くも歴朝、老を愛護し玉ふ範を示し玉ひ、養老の詔さへ下し玉へり。下亦た之に倣ひて、敬老の風自から俗を爲すに至る。各地に養老に關する會の設けられたる所以亦たこゝにあり。吾が東京養老院は明治三十六年九月八日、菊地尙彦氏が淺草區松清町共同便所内に一老翁が縊死を企てたるを見て之を制止し保護したるに因し、同月十一日下谷區竹町の自宅に東京救護會なるものを設け、會員組織となしたるに創り、六十歳以上の犖獨者を救護しむるが、後東京養老院と改稱して本所中之郷業平町に移轉し、爾來轉々して下谷區入谷町に移轉し、同時に菊地氏辭して松濤神達氏理事長となり、深谷地治郎、

金子元藏兩氏松濤氏を扶け、之により事業益々發展し、基礎亦た大に鞏固となり、財団法人の許可を得、内務省、東京府より年々助成金の下附あり、宮内省よりは正十年より事業奨励費御下賜あり、現在の所に移轉以後は事業擴張し、恆に二百數十名を收容するに至る。然るに理事長松濤神達氏昭和十一年一月十五日突如として逝去す。氏の後半生は全く養老院の爲めにさゝげたるものと謂ふべく、その功績は洵に顯著なるものあり。その後現理事者就任するや、浄土宗務所の多大の援助の下に、銳意本事業の擴充に努めし甲斐ありて、更に院長として浄土宗大本山増上寺法主大僧正大島徹水師を推戴するに至りたり。こゝに吾等は永年に亘り援助せられたる同情者各位に深厚なる感謝の意を表すると共に、新に同情者を得て此三十五周年を期し、益々事業を擴充し、現下の非常時局に對處して遺憾なきを期せんとす。



養老院とは何か

養老院とは何か。それは社会事業の一種でありまして、世の貧困なる考廢者を收容救護する施設であるは申すまでもありません。したがつて養老院といふものゝ眞の意義を明かにするには、勢ひ社会事業そのものゝ意義を明かにする必要があるす。然らば社会事業とは如何なるものであるか。それは要するに社会連帶思想に基き、社会組織の缺陷から生ずる社会的疾患を除き、或ひはこれを未然に防止する實踐的努力でありまして、その起原は宗教的の慈悲・仁愛の精神から發した個人的または團體的努力でありました。

それ故に現今の社会事業が今日の域に達するまでには、大體三つの過程を辿り來つたものでありまして、その第一は慈善事業、第二は救濟事業、そして第三はこゝにいふ社会事業なであります。慈善事業とは、申すまでもなくわれ／＼人間がも

つ同情・測隱の情よりして行ふ個人的施與の行爲が、僅かに公共的に伸展した施設に過ぎないのでありまして、言はゞ人間本來の慈悲・同情の發露と、宗教的觀念によつて醇化せられた慈悲的觀念の具體化たるに過ぎないのであります。そしてこの種の事業は遠き昔より行はれたのでありして、我が國におきまして、一時佛敎が特に隆昌を極めた聖武天皇や光明皇后の御代には各地に施藥院・療病院・悲田院・敬田院等の公の施設が創始され、赤子救恤の大御心を垂れさせられた事實があり、それ以來、各時代を通じて同様な施設が行はれて來たのであります。

然しながら、時代が進むにつれて、この慈善事業の存續だけでは飽きたらなく感ずるやうになり、勢ひ第二の救濟事業の勃興を促すに至りました。すなはち謂ゆる慈善事業においては、その施與が常に任意の行爲であるところから、當然救助せらるべき人があつても、慈善を行ふ人の方で同情心を起さぬ限り、その人を救助することは殆んどありませんでした。といふのは、慈善事業にあつては、救助せねばな

らぬといふ觀念よりも寧ろ救助してやるといふ觀念の方が一層多く支配してゐたかでありまして。そんなわけで、一方任意の濫給が甚だしかつたと同時に、他方救助すべき者に對する漏給が甚だしかつたので、自然漏給者たちの不平不満となり、それがまた社會にとつての脅威・壓迫となるに至り、遂にそれを修正すべき運動が起るやうになりました。これすなはち救濟事業の勃興した所以であります。要するにそれは救護を要する者のすべてを救濟しようとする企てにはかならなかつたのであります。したがつてこの救濟事業は、前の慈善事業にくらべると、遙かに組織的であり一般のではありませんが、それと同時に餘りに法規的でありましたところから、元來宗教的觀念を基調とする慈善事業にくらべると、殆んど全く熱もなく力もなく、たゞ形式的な事業となつてしまつた嫌ひがありました。こゝにおいてか第三の社會事業が勃興して、慈善事業や救濟事業の弊害を清算し、飽くまでも熱愛最善の精神に基く完全なる事業として立つに至つたのであります。

言ふまでもなく、社會は常に個々人の單なる集合ではなくて、それは實に個々人の連帶的統一であります。したがつてこの社會における一個人の缺陷は、陰に陽に社會の一部に影響をおよぼし、社會の一部の障害はまた直ちに社會全體に波及してその社會並びに國家の基礎を危殆に導く結果となります。それ故にその缺陷は必ずや社會全體の力によつて矯正しなければならぬのであります。これが謂はゆる社會連帶の思想でありまして、今日の社會事業はすなはちこの觀念を基調とするものにほかならないのであります。

ひるがへて我が國の社會事業をみまするに、その最初は窮民救助の消極的施設が多く、謂はゆる慈善事業の域を出なかつたのであります。戦後の社會運動に刺戟され、殊に大正十二年の大震災によつて漸く隆盛となり、各都市・府縣に社會局または社會課が設置され、内務省には社會局が設けられ、今日ではそれが厚生省なる獨立した一省となつて、全國の社會事業を統督するやうに

なつたのであります。

以上は一般社會事業なるものゝ意義および發達の概略であります。これによつてみてもそれが一環をなす養老事業の意義および發達の過程を推測することが出来るやうと思ひます。すなはち今日社會事業の一施設たる養老院なるものも、その初めは他の社會事業と同様に一種の慈善事業であり、それが發展して救濟事業となり、更に進んで社會事業の一環となつたことは疑ふべくもない事實であります。したがつて今日我が國に存在する養老院なるものは、決して單なる慈善事業や救濟事業ではなくて、社會連帶思想に立脚した純然たる社會事業でありまして、その多くは何れも去る昭和七年以來實施されつゝある救護法に基く救護施設であります。

かくの如くして今日謂はゆる養老院なるものは、單に一人もしくは一團體の個人的なる温情主義的救濟機關ではなくして、今や社會に缺くべからざる公の機關として國家が認める一施設とはなりましたが、しかもそれら養老院の個々について考

へますと、おの／＼その發達の經路を異にし、等しく社會連帶主義に立脚してをりながらも、各個別々の主義方針によつて經營されてゐることは、また否むことの出來ない事實であります。

然らば我が東京養老院の主義とし目的とするところは何であるか。次にすこしくそのことを説明いたします。

東京養老院の目的

東京養老院は、明治三十六年東京市下谷區竹町にさゝやかな東京救護會なるものを創設して以來、老いて子なく身寄なき貧しき人々の救護を目的として孜々其の事業を經營し來り、畏くも宮内省の御下賜金を始め、官府の御庇護と一般仁慈諸賢の御後援に依つて逐年其の規模を擴大し、内容を充實しつゝ今日に至つたのであります。して、本年は恰もその創立滿三十五周年に相當いたします。

我が東京養老院の目的とするところは、畏くも列聖その範を垂れさせ給ひし敬老の御精神を體し、佛陀大慈悲の教旨に基き、世の不幸なる老人を收容し、その餘世を安穩に過させるにありませう。別言すれば、み佛の大慈悲心を以て天涯孤獨の老いたる同胞に接し、同信同行者としていたはり慰め、安心立命の境地に導かんとするのが本院の主義とするところであります。

元來、本事業は、他の社會事業と異なり、すでにこの世に於て爲すべきことをなし終へたところの、最早何らの希望も要求もなき、随つて緊張とか努力とかいつたものゝ種切れとなつた高齢者を取扱つてをりますので、他の感化院や養育院のごとく少青年を相手とするものとは全然その性質を異にしてをります。本院は右の點を常に考慮に入れて、在院者を出来る限り寛大に取扱ひ、事務の運び方なども、つとめて緩やかにし、あまり面倒な干渉は極力避け、とにかく老いたる人々の残れる生涯を、出来るだけ安らかにのび／＼と送らせるといふ點に主眼を置いてをるのであります。

要するに本院の主義とするところは、物質的救済と共に、否それにもまして精神的救済に重きを置く點であつて、救済を受くるものも與へるものも、常に皇恩に感謝し、聖壽の無窮を祈りつゝ、同信同行の立場で、互ひに尊重敬愛しつゝ生き抜かうと努めて居る次第であります。

本院の沿革

そも／＼本院の設立は、明治三十六年九月十一日、下谷區竹町なる菊地尙彦氏の自宅に、東京養老院救護會なるものを組織したことに始まるのでありますが、その動機は、同月八日菊地氏が淺草區松清町共同便所内に一老人が縊死を企てゝゐるのを見て之を制止し、保護したことにあるのであります。

爾來三十有六年の間、官府の御庇護と廣く一般仁慈諸賢の厚き御援助とにより、年と共にその規模を擴張して、今日に至つたのであります。そしてその東京養老院救護會が今の東京養老院と改稱されたのは明治三十七年のことでありまして、翌三十八年には本所區押上町に收容所を新築して、そこに移りました。ところがその翌年の三十九年には東京地方に大洪水がありまして、多數の避難民を出しましたので、本院は早速罹災救護部を設けてそれら避難民數百名を收容救助いたしました。

然るに當時はまだ本院も財團法人としての資格がありませんでしたので、事業を經營する上にも何かと不便が多かつたのですが、越えて明治四十三年、財團法人の認可を得ましたので、こゝに本院もいよく公の施設として社會事業に乗り出すことになりました。ところが、この大飛躍を前にして、不幸にも近火のため類焼の厄にあひ、記録その他一切を失つてしまひました。しかし不幸中の幸ひとでも申しませうか、この災厄に際して、本院收容中の老人一同は無事避難することが出来ましたので、一時下谷區入谷町なる最上寺を假收容所に充て、事業を繼續してをりました。この年、警視廳並びに神奈川縣知事より金品募集の認可を得ました。記録によると同年末現在收容人員は二十九名でありました。

しかし何時までも假收容所で事業を行つてゐることも出来ませんので、何とかして適當なる地を相し、一日も早く新建築にとりかゝりたいとは、當事者同志の念願でありましたところ、大正元年幸ひに現在の地を選定することが出来ましたので、

早速收容所の新築に着手いたしました。そして翌二年十二月には工事も落成しましたので、下谷の假收容所をひきはらつて、全部こゝに引き移ることになりました。何としても收容者は老人のことゝて、本院設立以來こゝで亡くなつたものゝ數も決して少なくないにも拘はらず、未だ定つた納骨所とてありませんでしたので、大正三年瀧野川中里町圓勝寺を本院納骨菩提所と定めました。この年 明治天皇青山御葬場殿舎並びに 昭憲皇太后代々木御葬場殿御廊下等が本院に御下附になりましたので、記念のためこれを本院講堂に改築し、恩賜講堂と稱して朝夕健康收容者の修養道場として參集せしめることにいたしました。恩賜講堂は平家建二十一坪であります。

さて、かくの如くして本院の外観は次第に整備してまゐりましたが、それと共に收容人員も年を逐うて増加してまゐりました。試みに大正元年以降同十二年八月末までの收容人員を示しますと左表の通りであります。

年度別	男	女	計
大正元年	11	19	30
二年	12	21	33
三年	13	19	32
四年	17	27	44
五年	19	28	47
六年	15	26	41
七年	22	31	53
八年	25	29	54
九年	24	37	61
十年	28	37	65
十一年	19	33	52
十二年	33	42	75

越えて大正十二年には事業擴張のため寄附行爲を改正し、同年三月二日附を以て認可を得ました。この年、九月一日には例の關東地方大震災火災がありました。幸ひにして本院はその厄をまぬかれましたので、直ちに門戸を開放して臨時救護部を設け、ひろく一般避難者の收容に努め、更に炊出し救護、日用品給與、浴室の開放および施療等出来る限りの應急奉仕をいたしました。次いで同年十一月には震災事務局より下附された組立バラック二棟を基礎として、收容所一棟五室を増設しました。老癈者のみを本院收容室に移し、他はそれごとく移轉せしめることにして臨時救

護部を閉鎖いたしました。この變災に際して本院が臨時に救護したものの、延人員は實に十一萬餘人に達してゐるのであります。なほこの年には東京市社會局より震災による老衰者救護を依頼せられて頼に人員が増加しましたので、更に一棟五室の收容所を新築することになりました。

かくて大正十三年一月、大震災火災善後會より金二萬五千圓、また内務省より事務繼續費として金二萬圓下附されましたので、翌十四年四棟二十四室の家庭寮を増築し、これを順風寮と稱して主として收容者中の夫婦者を入れることにいたしました。後更に一棟六室を新築いたしました。收容者はますます増加する一方でありまして、大正十三年末現在人員百九十一名でありましたが、翌十四年末には現在人員二百四十九名の多きを算する勢ひでありますので、自然病室も狹隘を告げ、病院新築の議もおこりましたが、一棟五室八十一坪の收容所内部を改造して病室に充てることになりました。これは昭和元年のことです。翌二年 大正天皇御大葬儀

御劍並びに御鏡等が本院に御下附になりました。

次いで昭和七年三月、東京府より救護施設々置の件につき認可を得、收容定員二百八十名に擴張いたしました。翌八年三月には救護法による施設擴張費補助の認可を得まして、同年五月病院の新築に着手しました。附属病院は敷地三百六十三坪六合で、その構造は木筋コンクリート、リシン塗、佛蘭西瓦葺二階建一棟であります。建坪は階下百二十三坪、階上六坪、計二百二十九坪、そして階下には診察室、治療室、歯科室、薬局、醫務室を設け、寢臺設備による重病室二室と看護婦室をおき、定員三十七名といふことになつてをります。また階上には會議室、事務室を設け、疊敷輕病室一室、同じく靜養室一室と看護婦室をおき、定員三十四名といふことになつてをります。そのほか附属建物として倉庫十坪、物置十二坪、洗濯場十一坪、浴場三坪七五が設置されてあります。右建築は翌九年四月竣工いたしましたので、定員は三百十名となりました。

以上は明治三十六年九月十一日、本院の濫觴たる東京養老救護會設立以來昭和九年四月新築附属病院竣工に至るまでの本院沿革の主要であります。悲しきことには去る昭和十一年一月十五日、本院理事長として多年本院のため苦心經營奮闘努力せられた松濤神達氏が突然逝去されたことあります。本院として實に痛惜に堪へざる次第であります。よつて深谷長玄氏が主事として本院の内容充實に努力されましたが、同氏が退任されると同時に、理事長の後任として傳通院貫主木村玄俊氏を迎へることが出来、また新に大島徹水大僧正を院長に仰ぎ、他の理事諸氏と共に銳意本院のために努力經營されることになりましたので、本院の發展は期して待つべきものあるを思はせます。

本院の施設及び組織

本院は前述の目的を達する爲め左の如き事業を行います。

〔財団法人東京養老院寄附行爲第二條参照〕

- 一、老衰者の收容救護
 - 二、老衰者の居宅救護
 - 三、老衰者及び其の他の者の救療
- 右の事業以外に必要な事業は評議員會の決議を以て定められることになつてをりますが、何と申しても、第一の「老衰者の收容救護」といふことが本院の中心事業であります。

然らば本院の事業は如何なる設備、如何なる組織のもとに經營されてゐるか。次に此の點を申述べることにいたします。

一、設備

敷地の總面積は二千二百八十六坪、建物の總坪數は一千四十五坪で、その種類は左の通りであります。(鳥瞰圖参照)

恩賜講堂	壹棟	(五室)
本館	壹棟	(十五室)
集寮	五棟	(廿八室)
家庭寮	五棟	(四室)
病院	壹棟	
裁縫室	壹棟	
理髮室	壹棟	
附屬建物	十三棟	

恩賜講堂は、長くも 明治天皇の青山御葬場幄舎並に 昭憲皇太后の代々木御葬

理事 五名以上十名以内
監事 三名以内
評議員 十名以上二十五名以内

昭和十三年九月一日現在に於ける役員は次の如く構成されてあります。

院長は大本山増上寺法主大島徹水台下、理事長は木村玄俊氏、理事は岡本貫玉(理事會長)、里見達雄(常務理事)、松濤達雄、金子元藏、山本敏一、川瀬專之助(法律顧問兼任)七氏、監事は原美久、森田鍊三郎の二氏、評議員は藤田寛隨(評議員會長)、鈴木晋明、木下友三郎、太田久七、大林徳太郎、渡邊眞海、矢島春道、相田良雄、務臺教眞、多賀屋秀巖、奥本超倫、伊藤常祐、河野官兵衛、山田得立の諸氏であります。

職員(有給)

昭和十三年九月一日現在に於ける職員は、參事一名、書記六名、囑託醫二名、藥

劑師一名、看護婦長一名、看護婦及び附添婦十五名、雜夫三名、外務員十九名、裁縫婦三名、炊事夫三名、雜役夫其他十名であります。

院長は院務を總理し、理事長は院長を助け、法人の代表者として理事、監事及び評議員等の役員の協力のもとに、本院の事業を統理いたします。理事長の下に參事があつて院の事務を處理いたします。本院の實務は、庶務部、會計部、救護部に依つて處理されて居ります。庶務部は、一般寄附金の募集、在院者の被服、炊事其の他庶務一般を處理し、外務係、倉庫係、炊事係等がこれに屬してをります。救護部は、入院希望者の收容及び救護に關する一切の實務を執行する機關であつて、救護部書記は雜婦と共に在院者の良き相談相手として在院者全體の調和融合につとめ、醫師、調劑係、看護婦及び附添婦等は在院者の衛生特に病弱者の救護の爲め撓まざる努力を續けて居ります。また雜役夫十名は食事の運搬、洗濯、屋外の掃除等の役目をいたします。

入院手續

本院に於ては、次の資格ある人々を收容いたします。

入院資格

- 一、東京市内に一定の住所を持ち、年齢六十歳以上の貧困で自活能力無き老衰者であつて、入院を希望される者、及び救護法に依る被救護者として當該區長より其の收容を委託せられた者
- 一、東京市外の入院希望者にして救護法に依る被救護者として當該市町村長より其の收容を委託せられた者
- 一、今次の事變に於ける應召遺家族の老衰者にして困窮せる者
- 一、軍事扶助法に依り其の收容を委託せられた者

入院手續

一、自ら單獨でなす場合又は知人その他の紹介に依つてなす場合は、最近の戸籍謄本と履歴書を本院に提出すればよろしいのです。本院に於ては一應調査した上で適當に決定いたします。

一、救護法に依る者は其の居住地の救護委員に申出で所定の手續をなし當該市町村長の委託書を本院へ提出して頂きます。

入院決定者は、ひとまづ豫備室へ收容し、入院前の境遇や本人の體質、性格等を考查した上で、一番適當と認むる部屋へ轉室せしめ、在院者同志の平和と團欒を亂さず、たのしく安らかに老後を送れるやう配慮いたします。

病床保護を要する者は、直ちに病院に移して醫療を加へ、靜養させます。夫婦者は夫婦寮である家庭寮へ共に入室せしめ、相偕に老後を楽しく過させます。



院内の生活

一、在院者の職業及び年齢

本院は、上述の如き組織のもとに、常に二百有餘の不遇の老衰者を收容救護し、創立以來本年九月末日までに、延人員數、百五十七萬一千四百九十九名の多きに達してをります。

在院は、女子が男子よりも常に多く、而して被收容者の大部分は東京市に本籍を有するものであります。

現在入院者の收容前の職業を列舉すると次の如くであります。

男子

行商、羅宇屋、バタ屋、小使、職工、大工、建具屋、理髮師、下駄屋、足袋屋、植木屋、經木屋、表具屋、煙草屋、飲食店、易者、文筆、木工業、鑄物屋、玩具屋、古物商、櫛屋、炭

屋。

女子

下女、雑役婦、駄菓子屋、行商、踊師匠、娼妓、荒物屋、羅宇屋、碁會所、下宿屋、教師、理髮師、蠟燭屋、百人一首製造業、絲屋。

右の外、男女を通じ、自宅又は親戚の家に同居寄食せる無職の者が尠くありません。

在院者の年齢構成を見るに、本年三月末現在で、最低滿六十歳から最高九十三歳まであり、平均年齢は七十三歳であります。

二、在院者の日常生活

在院者は、いづれも世の荒波に揉まれて根氣も元氣も盡き果てた高齢者でありますので、勤勞又は作業の爲め氣張つたり努力したりすることは彼等の苦痛とする

處であります。老いたる人々にとつて最大の願ひは、靜かに憩ふこと、自由な平和な生活を送ることに盡きます。それ故本院に於ては青少年を對象とする學校や軍隊のやうな規則づくめの日課や時間割を勵行すること、又は勤勞奉仕を強制することを避け、たゞ團體生活を營む上から、次の如き日課を定めるにとゞめてをります。

午前五時半(冬六時)前後 起床

午前六時半(冬七時)前後 一同講堂に參集佛敎に依るお勤めを行ふ

午前七時(冬七時半) 各自の室にて朝食

午前八時 各自の室の掃除

午前八時半より午前十一時まで 入浴

午前十一時半 晝食

午後二時半 おやつ

午後三時 各自の室の掃除

午後四時半

夕食

午後五時迄

朝と同様お勤めを行ふ

午後九時半迄に

就床

右の日課表は大體の目安であつて、時間の遅速、長短は極めて自由にしてあります。そして在院者には部屋の掃除以外勤勞は一切強制しないことにいたしてをります。すが、たゞ健康者には本人の希望に依り、炊事、洗濯、掃除、裁縫等の手傳を爲さしめ、毎月手當を支給することにしてをります。

なほ喫煙は自由であります。飲酒は絶対に禁じてあります。外出は遠方の場合には、其の者の健康状態や行先等を考慮し、適當と認めた場合に許可して居ります。院の附近に買物や散歩に出るのは健康者には許して居りますが、かゝる自由が老いたる人々の生活意識に及ばず影響には意味深いものがあります。

三、在院者の慰安

勤勞であれ享樂であれとにかく此の世の事をしつくして今は何の野心も希望も持たぬ在院者には、取立ていふ程の娯樂趣味はないやうであります。静かな世界にのびくと手足をのびし安らかに休息することが老いたる人々には慰安であり満足であります。しかし強ひて娯樂を求めらば、室内のものとしては御詠歌、ラヂオ、碁、將棋、讀書等、室外のものとしては花卉園藝、養鶏等を擧げることが出来ます。右のうち御詠歌は毎月定期に指導を受け、各自の部屋で心の儘に稽古いたしてをりますが、毎日聲を出すといふことが、人間の生活を健康にし明朝にするものであるといふことがハッキリと認められます。

老いて子供に還つてゐる在院者を慰め喜ばすものは、何といつても菓子其の他のたべもの類であります。年末年始、御盆、春秋の彼岸、篤志家の寄附などあつた場合

に支給される小遣は、大部分たべものに使はれて居ります。次に本院の昭和十二年度行事の中で、特に老人たちを喜ばせた部分を抜萃することにいたします。

一月一日 老人一同無事越年し、雑煮に舌鼓を打ちつゝ新年を迎へ、講堂に參集して木村理事長導師の下に新年の祈願を行ふ。

一月五日 新年宴會にて、午前十時老人一同溢れ出づる歡びを抑へつゝ本院より充滿した折詰と同時に御年玉を戴き各自新春を壽ぐ。

三月三日 雛祭りにつき老人一同豆煎、甘酒を給與さる。

三月廿一日 午前十時より講堂に於て有無兩縁の先亡者追善供養の大法要を催し、老人一同參拜し終つて、牡丹餅、五目飯等に意義深い一日を過す。

四月八日 釋尊降誕祭にて老人の有志は早朝より甘茶を造り附近の者に給與す。

四月廿九日 天長節にて一同赤飯を喫し、聖壽萬歲皇室の御繁榮を祝福し奉る。

六月十三日 駒込教會兒童たちより草花多數、女子聖學院生徒たちより數多の生花、キヤラメルの寄贈を受け、一同深く感謝す。

七月二日 明照幼稚園兒老人慰問のため來院、神田光陽氏午後來院せられ講話をきかせ老人を慰問。

七月十二日 淑徳高女生老人慰問のため來院、生花多數寄贈せらる。

七月十九日 午前十時より施餓鬼會を執行し、當院關係先亡諸靈供養のため老人一同へ金一封を支給す。

七月廿一日 老人一同は施餓鬼會に受けたる金一封の一部を本院従業員と共に今次事變に於ける北支皇軍慰問のため東京日日新聞社委託にて金三十五圓也を獻金し、皇軍の奮闘に深く感謝の意を表す。

九月廿三日 秋季皇靈祭にて老人達は恒例に依る牡丹餅にて満腹す。

十一月十日 今上陛下 御即位記念のため一同恩賜講堂に參集、皇恩無窮聖壽萬歳を祝福し奉り、式後例年の如く嗜好日を催し、老人各自希望の品（鰻井、親子井、壽司等）の給與を受け、歡喜に満ちた一日を送る。

十二月卅一日 同情者各位の御後援に依り老人一同元氣にて晦日蕎麥を喫し越年す。

四、在院者の健康状態

次に最近に於ける在院者の健康状態を見るに病弱者が比較的多く、健康者二人に對し病弱者一人といふ割合を示してをります。現に昭和十三年八月末日に於ける附屬病院に收容救護されてゐる病弱者の割合は、健康者の五割八分となつてをります。この趨勢は、病弱な入院者の増加を示すものであつて、養老院今後の經營上注目すべき現象といふべきであります。

試みに昭和九年度の收容状況を見るに、該年度新規收容者百〇一名、前年よりの越員二百六十七名、うち死亡及び退院せる者九十八名で差引二百七十名にて翌年に越年いたしてをります。

左表に依つて明かなる如く、昭和八年末に於ては病弱者は健康者の三割八分であつたのに對し、昭和九年度新收容者に於ては一躍九割六分となり、病弱なる入

院者は健康なる入院者とほゞ同数を示してをります。

而して昭和七年末に於ける病弱者對健康者の比率は三割二分であるので、病弱入院者増加の傾向は、昭和九年度より顯著となつたわけであります。

昭和九年度收容狀況

病健 者康 比者 率對	計	性		種別	
		女	男	健康者	病弱者
一〇〇%	一九三	九八	九五	昭八ヨリノ越員	健康者
三八%	七四	四一	三三	昭九年度新收容者	病弱者
一〇〇%	五三	二三	三〇		健康者
九六%	四八	二七	二一		病弱者

健康入院者に比して、病弱入院者増加の理由としては、我が國金輸出再禁止以

來の經濟の躍進、特に支那事變による老人の仕事の増したこと、其のほか種々擧げ得るでありませうが、昭和七年救護法實施せられ、同法に依つて自活能力なき年齢六十五歳以上の老人が居宅救護を受けることになり、その結果健康者にして收容申込を爲すものが漸減したことが最大の原因と考へられます。従つて本院に於ても健康者を收容する集團寮舎其の他は定員に満たず、また收容餘力を残して居るのであります。病院は常に満員の状態にあり、老衰者救護事業の將來は早晚病療本位に其の施設を改むる必要があるのではないかと考へられる次第であります。

序ながら在院者の健康保持に就て一言すれば、本院に於ては、特別に體操或は健康法といったものは課してをりません。ひとり健康法に限らず規則的にあつせよからせよと註文を出すことは、老いたる人々の生活を理解した態度とは考へられないからであります。そこで本院としては、老人たちの日常生活そのものが自然に健康法に叶つてゐるやう配慮いたしてをります。一例を擧げるならば、朝夕のおつとめ

のため講堂に出かけるといふことが、老人たちの健康保持となつてをるのであります。即ち在院者の部屋から講堂まで長い廊下を歩かねばなりませんので、これが自然に適度の運動となり、また本尊様の前で大聲でお経を誦するといふことが一種の深呼吸法として在院者の健康増進に役立つわけであります。

その他、各自の部屋で氣儘に御詠歌を歌ふこと、散歩、掃除、園藝、入浴等いづれも健康法として意識こそされてをりませんが、老人たちに相應しい健康法となつてをります。要するに、院に於ける日常生活のうちに健康法が織り込まれてゐるのであります。

終りに收容者の在院期間はどうかとなつてをるかと思はすと、本年八月末の調査に依れば、平均在院期間は七年八月月であつて、五ヶ年以上の在院者は、全體の四分を占むるといふ良好な成績を示し、本院に於て十年以上十五年も平和な餘生を送りつゝある八十九十の長壽者が十五人もをります。

維持方法

本院を經營するに當つて必要なる經費は、一體、どこから、どんな風にして支辨せられるのであるか、次に本院維持の方法に就て申述べたいと思ひます。

本院は、救護費、衛生費、事業費、外務事務費、臨時費等の名目の下に、年額七萬圓ほどの經費を支出いたしてをりますので、この費用を如何にして捻出するかといふことは、當事者として大きな問題であります。

年總額七萬圓餘のうち救護費は、收容者の衣食住一切の費用を含み、衛生費は收容者の診療、看護の費用は勿論、藥物、醫師看護人の給料をも含みます。事業費は、事務員の俸給、借地拂其の他の庶費からなり、外務事務費は、賛助會員募集費が主なるものであります。

右の費用を支辨して本院の事業を維持經營する財源としては宮内省の御下賜金を

初め、諸官衙の補助金、特別寄附金、本院の基本金の利子等いろいろあるのですが、何と申しても本院維持費の主要部分は、一般仁慈諸賢からの寄附金であります。現在では、毎月十錢以上寄附下さる人を賛助員とし、同じく三十錢以上を特別賛助員とし、一圓以上を有功賛助員として、東京府下一圓に、二十人の外務員を派して、これ等月次賛助員会の獲得に努めてをるのであります。しかしてこれ等月次賛助員のうちで重要な地位を占めるのは、毎月十錢づゝ寄附される一般仁慈諸賢であつて、本院の經常費は、主としてかゝる方々の淨財によつてまかなはれるのであります。随つて寄附を頂きにあがる外務員の人々も、出發に先立ち、先づ恩賜講堂の御本尊の前に額き、身心を淨めることを忘れないのであります。然しながら事變の影響でもありませうか、以前にくらべますと、最近は新たに賛助員になられる方が少ない傾きがあります。しかし、養老院もまた重要な銃後施設として現に一役を演じてゐるのでありますから、平時にしまして、多くの賛助員を必要とするのであります。

右は、月々きまつて寄附して下さいる人々であります。このほかに、随時、多額の金品を寄贈下さる篤志家もございます。さうした臨時の寄附の中には、たとひ其額は僅少であつても、涙なしには受取ることの出来ない、まごころの籠つたものも少なくないのであります。

一筆申上げます。御厄介になりました吉井イトの三年忌に心ばかり佛様へお供へ下さいまし。

といふ手紙を添へて、何がしかの金を書留で送つてこられた淺草のさる料亭の婦人もあります。

早速ですが私方では商賣柄たばこの吸殻が一ぱいたまりますので、いつも捨てしませふはもつたいたいと思つてをりましたところ、養老院のことを思ひつきまして、まだ少しは吸へるのを丹精しておきましたところ、これだけたまりましたからお送りいたします。そ

第四條 本法人ハ事務所ヲ東京府東京市瀧野川區中里町百六拾番地ニ置ク

分院又ハ出張所ヲ設クル必要アル場合ハ評議員會ノ決議ヲ以テ設クルコトヲ得

第三章 資産及會計

第五條 本法人ノ資産ハ左ノ各號ヲ以テ構成ス

一、大正十二年三月二日ノ寄附行爲變更當時ニ於ケル所有財産見積價格總計金六萬九百圓也

二、所有財産ヨリ生スル所得

三、其他一切ノ收入金品

第六條 本法人ノ資産中左ニ掲クルモノヲ以テ基本財産トシ之ヨリ生スル收入ヲ使用スル外

其元本ヲ消費セサルモノトス

但シ特ニ必要アルトキハ評議員會ノ決議ヲ經テ其一部ヲ使用スルコトヲ得

一、第五條第一號ノ財産

二、基本財産ト指定セル寄附金品

三、評議員會ノ決議ヲ經テ繰入タル財産

第七條 基本財産以外ノ資産ヲ以テ運用財産トシ經費支辨ノ用途ニ充ツ

第八條 本法人ノ資産中現金ハ郵便官署若ハ確實ナル銀行ニ預入シ又ハ國債其他確實ナル有

價證券ヲ買入レ若ハ確實ナル信託會社ニ信託シ利殖ヲ圖ルモノトス

其他資産管理方法ハ理事會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第九條 本法人ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月末日ニ終ル

第十條 本法人ノ毎年度ノ收支豫算並ニ豫算外支出ハ評議員會ノ決議ヲ經テ之ヲ定ム

決算ハ其年度末ノ財産目錄ト共ニ監事ノ監査ヲ經テ評議員會ノ承認ヲ受クルモノトス

第四章 役員

第十一條 本法人ニ左ノ役員ヲ置ク

一、院長 一名

二、理事 五名以上十名以内

三、監事 三名以内

四、評議員 十名以上二十五名以内

第十二條 院長ハ佛教信仰ヲ有シ德望地位共ニ高キ人ヲ理事會及評議員會ノ決議ヲ經テ推戴ス
院長ハ本院ノ院務ヲ總理ス

第十三條 理事ハ評議員會ノ決議ヲ經テ院長之ヲ委囑シ其任期ヲ三ケ年トス

第十四條 理事中ニ於テ理事長及常務理事各一名ヲ互選ス

理事長ハ院務ヲ統理シ本法人ヲ代表ス

理事長事故アルトキハ常務理事其職務ヲ代理ス

第十五條 理事ハ院務ヲ處理ス

第十六條 監事ハ評議員會ノ決議ヲ經テ院長之ヲ委囑シ其任期ヲ二ケ年トス

監事ハ財産及業務執行ノ狀況ヲ監査ス

第十七條 評議員ハ理事會ノ決議ヲ經テ院長之ヲ委囑シ其任期ヲ二ケ年トス

評議員ハ院務ヲ評決ス

第十八條 理事及評議員中ニ於テ理事長及評議員會長各一名ヲ互選ス

理事長及評議員會長ハ各會議ノ議長トナリ議事ヲ處理ス

理事會長及評議員會長事故アルトキハ豫メ理事會及評議員會ノ指定セル理事及評議員其職務ヲ代理ス

第十九條 補缺ニ依ル役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第二十條 役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其職務ヲ行フモノトス

第二十一條 本法人ニ參事若干名ヲ置ク

參事ハ理事會ノ決議ヲ經テ理事長之ヲ任免ス

參事ハ理事長ノ旨ヲ承ケ事務ヲ處理ス

第二十二條 理事及評議員ハ相互ニ之ヲ兼ヌルコトヲ得ス

第五章 會 議

第二十三條 理事會ハ理事長必要アリト認ムルトキ隨時之ヲ招集ス

理事過半數ノ請求アルトキハ理事長ハ理事會ヲ招集スルコトヲ要ス

理事會ノ招集ハ會議ノ目的タル事項ヲ示シ五日以前ニ書面ヲ以テ通知ヲ發スルコトヲ要ス
但シ緊急ノ場合ハ此限ニ在ラス

第廿四條 理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス

第廿五條 理事會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第廿六條 定期評議員會ハ毎年二月理事長之ヲ招集ス

・ 理事長必要アリト認ムルトキハ隨時評議員會ヲ招集スルコトヲ得

第廿七條 評議員會ハ評議員二分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス

但シ同一事項ニ付招集二回ニ及フトキハ此限ニ在ラス

第廿八條 第二十三條第二項第三項及第二十五條ノ規定ハ評議員會ニ之ヲ準用ス

第六章 會員及會友

第廿九條 本法人ニ左ノ會員及會友ヲ置ク

一、名譽會員 本法人ノ事業ヲ翼賛シ多額ノ金品ヲ寄附シタル者若ハ特殊ノ功勞アリテ特ニ推薦シタル者

二、有功會員 一時ニ金百圓以上ノ金品ヲ寄附シタル者若ハ毎月金壹圓以上寄附スル者

三、特別會員 毎年金五圓以上ノ金品ヲ寄附スル者若ハ毎月金五拾錢以上寄附スル者

四、通常會員 毎年金壹圓以上ノ金品ヲ寄附スル者若ハ毎月金拾錢以上ヲ寄附スル者
前各號ノ外本法人ノ主旨ヲ贊シ隨時金品ヲ寄附スル者ヲ會友トス

第三十條 本法人ハ毎年適宜會員ニ事業及財産ノ狀況ヲ報告スルモノトス

第七章 寄附行爲ノ變更

第卅一條 本寄附行爲ハ理事及評議員ノ各三分ノ二以上ノ同意ヲ得且主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第八章 解散

第卅二條 本法人ハ法定ノ解散事由發生スルニ非サレハ解散スルコトヲ得ス

第卅三條 本法人ノ解散ヲ爲スニハ理事ハ豫メ評議員會ノ決議ヲ經且主務官廳ノ認可ヲ受ケ資産ハ本法人ノ目的ト同一若ハ類似ノ團體ニ寄附スルモノトス

補則

第卅四條 本寄附行爲施行上必要ナル細則ハ評議員會ノ決議ヲ經テ理事長別ニ之ヲ定ム

以上



「記のままた見」院老養京東

為行附寄院老養京東人法關財

法人團 東京養老院役員名録

評議員會長	同	監事	同	同	同	同	理事	常務理事	理事會長	理事長	院長	
藤田寛隨	森田鏡三郎	原善久	川瀬專之助	山本敏一	金子元藏	松濤達雄	里見達雄	岡本貫玉	木村玄俊	大島徹水	評議員	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
山田得立	河野官兵衛	伊藤常祐	奥本超倫	多賀谷秀巖	務臺教眞	相田良雄	矢島春道	渡邊眞海	大林徳太郎	太田久七	木下友三郎	鈴木晋明

本篇の筆者は直接東京養老院に關係をもつ者ではないが、多年一般社會問題の研究に従事し、殊に養老院の經營には大なる關心を有するところから、一日、東京養老院の參觀を思ひ立ち、院の内外を隈なくみせてもらつたので、見聞のあらましを記してこの概要の後に載せてもらふことにした。

一、朝の「おつとめ」

駒込の驛を出て踏切を左に渡つて少し行くと右へ折れる通りがある。それを約三丁ほど行くと、今度はやゝ広い通りにつき當る。それをまた右へまがると、すぐそこに省線電車の踏切が見える。その踏切の手前の左右兩側に石の門の立つてゐる可なり大きな構へが向きあつてゐる。その左側にあるのが東京養老院で、右側のはその附屬病院である。

まづ本院の門をはひると、正面に講堂があり、その左側を通つて行くと突き當りが事務室であつた。刺を通ずると主事の山田さんがをられて、二階の一室でお目にかつた。前からの約束で、今日は一日この養老院にゐて、老人たちの生活を見せてもらつたり、院の經營その他につき山田さん始め事務のかたぐいのお話をきくことになつてゐたのであつた。私たちが來たのは丁度六時十分過ぎた頃であつたが、暫く山田さんと話してゐると、やがてドン、ドンと太鼓が鳴つて、急にあたりがざ

わめいて来た。太鼓の音は老人たちが朝のおつとめに講堂にあつまる合圖であつた。導かれるまゝに講堂へはひると、五十疊も敷かりさうな大廣間に、男女合せて八九十人ばかりの老人連がゐるならんで、既にお念佛をとなへてゐた。正面の佛壇には阿彌陀像が安置してあり、その右側には聖徳太子の繪像が掛けてあり、そして左側には幅一尺高さ五尺もありさうな大きな位牌が三基ならんでゐた。よくみると、それらの位牌には縦横ぎつしりと戒名が書きこんである。言ふまでもなくそれらは、本院創立以來こゝで亡くなつた人々の戒名である。佛壇の前には小さな卒塔婆が幾つか立てならべてある。それらも同じくこゝで亡くなつた人たちの卒塔婆であつて、今日はその人々の年回到當つてゐたのである。かうした年回は毎月行はれるのである。卒塔婆の前には經机が置いてあり、その上には分厚な去過帳が三冊つんである。机の右側には大きな木魚が置いてあり、そして左側には、おゝ、七十ばかりの一人の人が目をつぶつて珠數をつまぐりつゝカンカンと鐘をたゝいてゐる。その鐘の音に合わせて、一座の老人連は、今しも次の如き法然上人の御遺訓「一枚起請文」を

となへつゝあるのであつた。

もろこし我が朝にもろくの智者たちのさたし申さるゝ觀念の念にもあらず。又學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず。唯往生極樂のために南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず。ただし三心四修と申すことの候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにもこり候なり。此外におくふかきことを存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人はたとひ一代の法をよくく學すとも一文不知の愚鈍の身になして尻入道の無智のともがらに同うして、智者のふるまひをせずして只一向に念佛すべし。

證の爲に兩手印を以てす。

淨土宗の安心起行此一紙に至極せり。源空が所存此外に全く別義を存せず。滅後の邪義を防がんとために所存を記し畢。

建曆二年正月二十三日

大師在御判

老人たちの聲はそろつてゐるとは言はれなかつた。それは無理もないことであ

る。第一に教養の程度もまじくであるに加へて、こゝに十年以上も收容されてゐて、朝夕おつとめに精だしてゐる者がゐるかと思へば、まだほんの昨今入院したばかりの新參者もまじつてゐるからである。だが、こゝへ来ておつとめするほどの老人は、いづれも皆熱心であつた。と、前の鐘たゞき老人の鐘の音が急に速度をはやめたかと思ふと、それがびたりとやんで、念佛は終つた。一座の老人たちはおのがじし座蒲團を小脇にかゝへて、あたふたと講堂を出て行つた。記者にはそれが意外のやうにも思はれたが、それもそのはず、老人たちの室には朝の食事が待つてゐるのであつた。

二、恩賜講堂

山田さんの話によると、老人たちのおつとめは毎日朝夕二回づゝ行ふことになつてをり、規則としては病人以外のものは悉くおまわりすることになつてはゐるが、こちから強制するやうなことはなく、専ら當人の自由意志にまかせてゐるとのこと

とであつた。なほこの講堂は長くも 明治天皇の青山御葬場殿舎並に 昭憲皇太后の代々木御葬場殿御廊下等御下附になつたのを、大正三年記念のため講堂に改築したものであつて、それ故にこれを恩賜講堂と呼んでゐることである。しかしこの講堂は朝夕のおつとめにのみ用ゐられるのではなく、何事によらず老人たちのあつまりに用ゐられるので、院長や理事長等の説教や講話は勿論、亡くなつた老人たちの供養や葬式もこゝで行ひ、また篤志家の寄附によつて時々催される御詠歌や餘興などもこゝで行ふとのことである。餘興といへば昨年は三浦環女史などもこゝへ来て老人たちにうたつてきかせてくれたこともあり、また長唄協會副會長芳村伊四郎師社中の有志が来て長唄や舞踊を寄附されたこともある。最近はまだ烏森の藝妓連が、最負の客からこゝの養老院の話をきかされて菩提心をおこしたのか、一座をひきつれてやつて来て、この講堂でうたつたり踊つたりして老人たちを喜ばせてゐるといふ。何しろ收容者は六十歳以上の老人ばかりのこととて、いづれも三味線情調には深いおなじみがあるので、その喜び方は一通りでなかつたとのことであ

る。
講堂をひきあげて事務室へかへると、山田さんの發議でわれわれも今日は養老院の朝食を御馳走になることになり、連れのK氏と一つ膳にむきあつた。麥飯にお豆腐の味噌汁、それに香の物と梅干が添へてあつた。もとよりお粗末な食事であつたが、天涯孤獨の老廢者であると思へば有り難く頂戴することが出来た。

三、明るい集團寮

次に寮舎の生活を見せてもらふことになつたが、まづ第一に事務室の隣の女ばかりる集團寮へ行つてみた。建物は相當古くなつてはゐるが、いかにもがつしりした平家づくりである。庭に面した廣い廊下は拭き清められてあり、どの室もどの室も風通しがよく日當りがよかつた。さうした室が五つばかりならんでゐて、いづれも二十疊敷きぐらゐであつた。おばあさんたちは、まだ食事をしてゐるのもあり、もう膳をしまひかけてゐるのもあつた。膳は箱膳でめい／＼に支給されたものであ

る。われわれが室の前を通ると、おばあさんたちは叮嚀にお辭儀をした。どの顔も人相が好きさうなので、「これでも喧嘩をするやうなことがありますか」と事務の人に小聲できくと、「何しろ人生の古強者のあつまりですから、さういふこともないとは限りません」といふ。今のところ、一室に五六人の割合であるから、可なりゆつたりしたものである。

各室々には一つづゝ小さな爐が切つてあつて、炊事場から配給された御餅などを焼いて食べる事も出来る。また寒くなるとその周圍にかたまつて暖をとる。そのほか廊下には各室の前に大きな火鉢が一つづゝおいてあり、その上には瀬戸びきの大薬罐が掛けてあつて、自由にお茶を飲むことが出来る。この火鉢も冬はそれ／＼室内にもちこまれて保温の助けとなるのである。

室の掃除は午前午後二回行ふことになつてゐて、一定の時間に老人たちが一緒に行ふことになつてゐる。食事は三度三度はこばれるが、そのあと始末は自分ですることになつてゐて、それがために廊下の端れに大きな流しが出来てゐて、水も豊富

につかへるやうに水道がひいてある。なほ廊下の突きあたりの上の方には神棚が設けてあつて、太神宮様が祭つてある。また寮舎の入口のところに便所と風呂場とがあり、風呂場はコンクリートで可なり大きなものである。そして風呂は一日おきにたてることになつてゐる。

この女ばかりの集團寮と向きあつて、それと全く同じ大きさの一棟がある。こゝは反對に男ばかりの集團寮で、各室々にはおぢいさんたちが寝ころんでゐたり、本を讀んでゐたりしてゐた。すべては前の寮舎と同じ具合で、こゝにも廊下の突きあたりには神棚が設けてあつた。

うれしいことには寮舎と寮舎との間をへだてる庭が相當に廣く、おまけに庭木も豊富で、可なりの大木が幾つとなく植つてゐた。そして一面に芝生でおほはれ、ところ／＼に渡り石が點綴してあるなど、古い屋敷の庭園を思はせる感じであつた。

四、行届いた救護部

なほこの二つの集團寮をつらねて南面した一棟がある。そこには救護部と稱する一室のほか、やはり男ばかり收容する室が三つほどならんでゐた。救護部には男の事務員が二人と女の助手が數人ゐる。こゝは直接老人たちの世話をするところで、何といふことなしに老人たちの申し出る要求やら苦情やらをきいてやるところで、その備品箱の中には、種々雑多の藥品やら、楊子やら、齒磨粉やら、煙管やら、按摩の道具やらがはひつてゐて、いち／＼老人の申出によつて渡してやるのである。そのほか寄附された古雑誌などもこの室の外側にある書棚に立てならべてあつて、老人たちは自由に持つて行つて讀むことが出来る。

救護部員の語るところによると、こゝで問題になるのは主として人事關係で、それを防ぐために、始めて入院したものは一應豫備室へ收容して、本人の體質、性格、年齢等につき暫く様子を見た上で、それ／＼適當と思はれる室へ移すやうにしてゐるとのことである。それにも拘らず同じ人間が長い間一つ室にかたまつてゐると、何時とはなしに或る一人が勢力を得てはゞをきかすやうになりがちなので、時々人

の入れかへをやるのだといふ。

この救護部に隣した室々が謂はゆる豫備室なのであつて、そこには入院したばかりの老人や兎角世話のやける老人を收容することになつてゐる。さういへば、救護部のすぐ隣りの室では、最近入院した老人でもあらう、冬物の外套やら羽織やらを室一ぱいひろげて、叮嚀にたゝんでゐた。さすがに女の方にはさうした世話のやける老人はゐないらしく、したがつて特別の室も設けてはなかつた。要するに問題を起しやすい老人は、男女にかゝはらず、事務室の近くの室に收容することになつてゐる。

以上三つの集團寮のほかに、院の左手に道をへだてゝもう一つの寮舎がある。この寮舎は東と北に鍵の手になつてゐて、西や南は板塀でしきられてゐる。南向きになつてゐる三つの室は女の室で、西向きの二つは男の室である。庭も相當に廣くつてあるが、植木らしい植木はなく、その代りあちらこちらに盆栽棚があつて、手入れのゆきとゞいた鉢ものがならんでゐた。聞けばそれらの盆栽はいづれもこの寮

舎に住む老人たちが自分で買つて来て、自分で手入れしてゐるのであるといふ。これは老人にとつては打つてつけの楽しみである。盆栽が素人ばなれしてゐるのも、老人の中には一角の植木屋さんだつた人もゐるからである。

五、理髪屋さんの奉仕

導かれるまゝに今度は炊事場、裁縫室、理髪室等の諸設備をみせてもらつた。まづ事務所の裏手には田舎の納屋をみるやうな倉庫があつて、嚴重に錠がおろしてあつた。それに續いて炊事場があり、幾つもの竈に大きな鍋や釜がかけてある。その炊事場の隣の棟が裁縫室と理髪室とにあてゝあり、まだ新しいコンクリート建である。殊にその断髪室は、市中の理髪屋にもそんなのは滅多にない位に設備が完備してをり、椅子、鏡、その他一式びかくと光つてゐて、如何にも理髪室らしい感じである。收容されてゐる老人の中にも理髪屋さんだつた人がゐないわけではないが、多くは市中の理髪屋さんが無料で奉仕してくださるのだといふ。われわれが

行つた時には、一人の若い理髪屋さんが、今しがた仕事を終つて、せつせと床を掃いてゐるところだつた。「今日は朝から十やつたので、可なり忙しかつた」と言つてゐた。まことに御苦勞様のことである。

その隣りの裁縫室には、洗濯して折りたゞまれた布が山のやうに積まれてあり、その前に二三人の女の人が着物を縫つてゐた。それらはすべて院で雇つてある人たちだが、老人の中にはまだ裁縫の出来る人もゐるので、さうした人々には本人の希望によつて手傳ひをさせ、毎月幾らかづゝの手當を支給することになつてゐる。これはひとり裁縫に限つたことではなく、炊事でも洗濯でも掃除でも自ら進んで働かうとするものには手傳はせて、それ／＼手當を支給することになつてゐる。しかし他の收容所のやうに、老人たちに仕事を強制するやうなことは、こゝでは一切しないことになつてゐる。といふのは、何としても先のない老人のことで、その多くは慾もなく、たゞ出来るだけ安樂に餘生を全うしたいといふ念願であるのに、たとひどんな軽い仕事でもこちちから強制するとなると、自然競争意識にとらはれ、中に



ちた人老きな念餘に除掃

はそれを苦痛に感ずるものも生じて来て、折角の本院の大目的も達せられず、かへつて老人たちの平和を害するやうな結果になるからであるといふ。

被服はすべて院で支給することになつてゐるが、中には入院する時にもつて来たものを着てゐる人もある。その點は自由である。しかし多くの在院者の中には着物に限らずいろ／＼なものを有つてゐて、それを金にかへるために襦袢屋をよんで賣るものがあり、すると自分に何も有つてゐないものは、院で支給した物まで賣り拂ふといふやうなことがあつたので、現在では在院者が直接ものを賣ることを禁止してゐる。その代り不用なものはすべて院で買ひとつてやり、そして利用すべきものは利用し、賣り拂ふべきものは賣拂つて、現金を本人に渡してやる。

もとより極貧者のあつまりであるから大した品物を有つてゐるはずもないが、院の方針としては、品物は入院する前にすべて処分して金にしてもつて来るやうにすすめてゐる。そんなわけで在院者の中には比較的多くの小遣を有つてゐるものもあり、それが本人の金である以上は院としてはそれをつかふことを禁ずることも出来



時しめるひ

これは或る日の集團寮の晝食の場景です。老いて子供に還つてゐる老人たちを喜ばせるものはたべもの類です。篤志家の温かい贈り物も添へられた食事時を老人たちはどんなに楽しみにしてゐることでせう。

す、さうかといつてそれを自由につかはせておくことは全體の平和をみだすおそれがあるので、現金はすべて院であづかつておき、月々一定額を限つて渡してやることにしてゐる。

六、老人のたのしみ

ところで、さうした小遣ひは一體何につかはれるかといへば、老人の楽しみは何よりも食べもので、多くはお茶菓子のやうなものにつかはれる。それも上等のお菓子を少し買つて来て、獨りではつくたべるといふのではなく、必ず同室のものにもわけてやれる程度の安いお菓子である。これは老人としても自然に有つてゐる人情で、特にこちらから注意しなくても、必ず皆してわけあつてたべてゐるやうである。

それからまた煙草を喫ふのは自由であるが酒を飲むことは絶対に禁じてある。それにも拘はらず、外へ出て内證にやつて来る不心得な老人も稀にはあり、それも

普通の酒ではなくて、悪酔ひのする安いウイスキーやブランデーを飲んで来る。それ故本人は知らん顔してすませるつもりでも、その強い悪臭のためにたちまちわかつてしまふのである。

外出は申出により本人の性格や健康状態を考慮し、その行先を十分考へた上で適當と認められた場合に限り許すことになつてゐるが、院の附近に買物などに出て行くのは自由である。

一般收容者に對しても年末年始と春秋の彼岸等には一人三十錢づゝの小遣ひが支給されるが、篤志者から寄附があつた場合などには別に臨時に支給されることもある。そしてこの小遣ひをもらふことが老人にとつては何よりの楽しみであり、その小遣ひはまた大部分食べものにつかはれるのである。そんなわけで、院でもこの點には十分の注意を拂ひ、老人たちの健康を害さぬことを條件として、出来るだけその希望に添ふやうに努めてゐる。

序に八月十五日以後一週間の献立表を記せば次の通りである。



日	朝食	昼食	夕食
八月十五日	味噌汁、豆腐、梅干	煮に肴	スマシ汁、小松菜、油揚げ
同 十六日	味噌汁、大根、梅干	野菜煮付け	焼肴
同 十七日	味噌汁、若布、梅干	煮込鱈	小松菜浸し物
同 十八日	味噌汁、馬鈴薯、梅干	鯉コク	胡瓜モミ
同 十九日	味噌汁、焼麩、大根、梅干	干ひ魚	シジミ汁、煮豆
同 廿日	味噌汁、油揚げ、梅干	月見芋	野菜サラダ
同 廿一日	味噌汁、葱、梅干	野菜煮付け	葛汁
毎月一日、十五日、廿五日の朝は小豆飯に豆腐汁。香の物は季節の漬物。			

七、平和な家庭寮

本院を出るとすぐ向う側は病院であるが、それは最後にみせてもらふことにして踏切を渡り、線路の向う側にある家庭寮を見せてもらふことになった。この家庭寮は踏切を渡つて間もなく左へまがる小路をはひつたところに建ちならんで、す

家庭寮の老人夫婦



写真の右は出征兵士の母で、盲目である上に他に頼るべもないので、本院に收容されてゐるのです

べて五棟あり、いづれも南に日を受けた明るい平家の建物である。寮舎といつても純然たる住宅で、入口には收容者の標札が掲げてあり、そのそばにある養老院の建物番號札さへなければ、誰れしもこれが家庭寮だなどは氣づかないであらう。寮舎の前や後の空地には雞頭や百日草が今を盛りと咲きほこつてゐる。家の中をのぞくと老人夫婦がゐて、われわれの姿を認めて叮嚀に挨拶する。家の構造は普通の住宅と少しも變りなく、座敷の真中には火鉢も置いてあり、臺所には水道もひいてある。だからこゝに住む老人夫婦にとつては、無いものは生活の苦しみだけだとも言ひ得るであらう。これでこそ長年不遇に苦しんだ老人たちも安心立命して餘生を安樂に過すことが出来るであらう。

原則としてこゝには夫婦者を收容することになつてはゐるが、しかし、入院希望者の中には兄弟して長らく一緒に暮して来たといふやうなものもあるので、さうした一團もやはりこの家庭寮に收容することになつてゐる。だから、こゝには夫婦者もゐれば、女の姉妹や男の兄弟もをり、また時には老人の親子の様な者もゐるとい

老人たちを喜ばせた女學生の訪づれ



餘興の三味線情調に浸りきつてゐる老人たち



ふのが實際である。

さうした家庭寮の一つに、今度の事變で息子が出征して獨りぼつちになつてしまつた目の悪いおばあさんがゐて、その人の世話を更に年とつたもう一人のおばあさんがしてゐる一團があつた。この老婆もまたその出征兵士のお祖母さんであるに相違なかつた。言ふまでもなく出征兵士の家族には扶助料がさがるので、これらの老人たちは必ずしも生活費に窮してゐるといふわけではないが、こんな風に年の若い方の老人が目が不自由では、とてもどうすることも出来ないで、やむを得ず養老院の厄介になつてゐるのである。今次の事變で出征した將兵の家族でこんな風なのは全國を通じてどの位あるか知れないであらう。この點から言つて時局下銃後施設としても養老院の存在理由は十分にあると思はれる。

五棟の家庭寮は、これを二十八室にわかち、すべて八十九名を收容することの出来る設備であるが、現在のところではその三分の二しか收容してをらない。われわれがそれら薄倅な老人の平安を祈りつゝ家庭寮を辭し去ると、その途中、一臺の箱

車が重さうに引かれてきた。その中には老人たちの晝食が用意されてあるのであつた。

八、完備した病院

前にも記したやうに、この病院は本院と向きあつて一劃をなし、可なり広い敷地にコンクリートの二階建が一棟たつてゐる。門をはひると正面が玄關で、恰も普通の病院と少しも變らない外觀である。それもそのはずで、最初の計畫では外來の施療患者も受付けるつもりで、それに便利なやうに設計されたからであつた。

玄關の左手が診察室、その隣りが治療室になつてゐて、いろ／＼な器械類が備へてある。そして右側が薬局になつてゐて、さまざまの薬瓶やら調劑の道具やらがならんでゐる。そのほか歯科室、醫務室などもあり、中の廊下を突きあたると、そこに大きな病室があつて、寢臺が横に二側ならんでゐる。こゝは一番重い病人を收容する室で、病人は大抵靜かにねてをり、あちらこちらに看護婦が立つてゐた。この

室の奥にもう一つの病室があつて、こゝにも前と同じやうに寢臺がならんでゐたが、病人の大部分は横になつて看護婦と話をしてゐたり、寢臺に坐つて外の方を眺めたりしてゐた。これらは比較的軽い患者なのである。

たゞこの室に特にわれわれの目をひいた一人の老人があつた。それはもう七十近い女の人であつて、頭は眞白な斬髪であつたが、一見してたゞの老人ではないやうな氣がした。いかにも品のよい顔立ちで、しかもその目は相當教養のあるインテリらしい鋭さを示してゐた。近づいてみると、枕もとには數冊の書物があり、しかもそれが悉く英語で書かれたものであつた。本人に聞くのも氣の毒な感じがしたので、あとで事務の方に聞いてみると、この老婦人はもと長い間外國人のところにて、自然英語も達者であつたところから、若い頃は通譯などして働いてゐたが、だん／＼年とるにしたがつてそれも出来なくなり、自分の家で英語の個人教授などして辛くもその日を送つてゐたところ、いつとはなしに病み出した神経痛がはげしくなつて、最早どうすることも出来なくなり、もとより獨りものである上に、ほかに

よるべもなかつたので、こゝへ收容される身となつたのだといふことであつた。

それから階段をあがつて階上へ行くと、こゝにも會議室や事務室があつて、階下にあるのと同じ位の大きさの病室が二つあつた。しかしこちらの病室は二つとも寢臺ではなくて、疊が敷いてあり、病人は蒲團の上に坐つて、互ひに話してゐられる元氣であつた。すなはち一方は輕病室で、こゝに收容されてゐる連中は、これといふ程の病氣はなく、たゞ自分で身のまはりの始末が出来ない程度の病人であり、他方は靜養室で、病氣も殆んど恢復した人々のみ收容されてゐた。

元來、この病院へは在院者の中で病床保護を必要とするものを移して醫療を加へることになつてゐるが、病氣によつてはこゝで處置することは非常に困難なので、さうした場合には適當な施設のある病院に移して治療を受けさせることになつてゐる。したがつて傳染病患者のやうなものは一切あつかはない。さまざまの病人のあつる中で、最も多いのは足腰の悪い神経痛やリウマチス患者であるといふ。

九、事變後の動き

序に記すと、この病院は昭和八年五月に新築に着手し、翌年の四月に竣功したもので、百有餘名を收容することが出来るが、現在では約六十五名ほどの病人を收容してゐる。そしてこれは現在の全在院者約二百二十名の三分の一に満たない數ではあるが、それにしても全體の割合からいふと病人の多いのには驚かざるを得ないであらう。老人が三人をれば、そのうちの一人は病人であることになる。しかもこの勢ひは最近殊にいちじるしくなつて来て、以前にくらべると、入院希望者中に病人が多くなりつゝあるとのことである。

このことは、とりもなほさず、現在の社會状態を反映してゐるものであつて、事變前にあつては、世の中が極度に不景氣であつたため、勢ひ老人の失業者も多く出るやうになり、したがつて、さうした老人は、働きたくても仕事がないので、心ならずも養老院の厄介になり来るといふ有様であつた。それ故、その當時にあつて

は、入院希望者の年齢も若く、體質も良く、したがつて病人の數は全體の割合からいふと非常に少なかつたのであつた。然るに一度事變が勃發すると、世の中は急にそがしくなつて来て、勢ひ老人たちの仕事も増して来たらしく、そこで何とかして働いて行けるものは入院を希望しないので、結局、非常に年とつたものであるとか、病氣で働けなくなつたものだけが入院を希望して来るやうになつたのであらうと思はれる。そしてこのことは社會のためには大いに慶すべきことであり、殊に今日の非常時にあつては、老いも若きも出来るだけの力をつくして國恩に報じなければならぬのであるから、最も喜ばしい現象であると言はねばならない。しかもさうした喜びのある反面には、如何に國恩に報じようと念願しても、既に老廢者となつて養老院に收容されるほかなき老人の増加を見るといふ事實があるので、養老院としてはその經營が困難となり、ます／＼一般同情者の寄附を仰がなければならぬのである。

なほこの病院の附屬建物として、倉庫あり、物置あり、そして病院の左側には洗濯場と風呂場とが設けてある。これらはいづれも新式で、洗濯も機械を用ゐてすることが出来るやうになつてをり、また風呂場も極めて衛生的で、便利に清潔に出来る。そしてこれらは、ひとり病人のためにのみ使用される設備ではなくて、一般在院者のためにも使用されることになつてゐる。

一〇、老人は語る

恩賜講堂、集團寮、家庭寮、病院といふ風に順次みせてもらった。これで殆んど全院の參觀が終つたので、老人たちには甚だ迷惑なことは思つたが、序のことにその身の上ばなしといふやうなものも聞きたくなつて、事務の人におたのみして、適當な人を選んできてもらひ、事務所の一室で對談することになつた。

以下はそれら老人の語るところを、そのまゝかいつまんで記したものである。

その一

田中豊太郎さんは、見るからに人の好きさうな、今年七十一歳の老人である。老人といつても髪は眞黒だし、腰も曲つてゐるわけではなし、身體は至極丈夫らしいので、こんな人が養老院にゐるかと思へば、むしろ不思議にさへ思はれる位であつた。しかし、だんく話してゐると、この人にも、やはりさうするほかなかつた事

情が十分にあつたことがわかつた。

この老人は記者との對談に、何時も低い聲で口ばやしやべるので、一つことを何度となく聞きかへさなくては要領を得なかつたが、この一事によつてみても、この人の頭のはたらきがどんなもので、それがまた彼れをして今日の境遇をまねかした原因の一つでもあらうとは、推測するに難くない。正直でたゞ働く一方の人間、それがどうして世の中の役にたつないといふことが出来ようか。にもかゝらず、今日の世の中は、たゞそれだけでは渡つて行くに困難であるらしい。

「私は明治元年に下谷金杉の上町に生れましたが、私が九つの時に母親が家出したので、一人あつた弟も親父の姉の家へくれられ、その後間もなく父親も亡くなつてしまつたので、私は全くの獨りぼつちになり、よそへ奉公にやられました。父親は盲目で、按摩を渡世してをりました。亡くなつたのは四十二でしたが、何しろ私の小さい時のことでしたから、何處に親父の親戚があるのやら、家出した母親は何處に住んでゐるのやら少しも知りませんでした。私の奉公にやられた先は煙管磨きの

職人の家で、そこに六年間奉公いたしました。私も一人前の職人になつたので、家をもつて煙管磨きをやりましたが、丁度その頃、どういふ間柄の人でしたか、一人のおばあさんをあづかることになつて、そのおばあさんと二人暮しで一生懸命に働きました。しかし、それも長くは續かないで、だん／＼不景氣になり、煙管磨きの仕事もなくなつてしまひました。だが遊んでもゐられないので、人の世話で千住の櫻組、今のベルト皮革株式會社へ日給三十錢で勤める事になりました。この櫻組には十三年も勤續したおかげで、日給も次第に増してもらひ、やめる頃には二圓八十錢ももらつてゐました。その間に先妻との間に子供が五人ありましたが、そのうち三人は小さい時に亡くなつてしまひ、あとの二人が丈夫に育ちました。二人とも女の子でしたが、先妻が亡くなると一緒に、妹の方はよそへ連れてしまひ、姉の方は奉公に出しました。間もなく後妻をもらひましたが、その頃、櫻組の方は一旦やめたことになり、特別のはからひで臨時職工として勤めてゐたところ、例の震災でまた首になつてしまひました。そればかりではなく、たつた一人の娘は震災で病氣に

なつて、奉公さきからかへされると間もなく死んでしまひました。これが私にとつて何よりの不幸でした。長い間の職工勤めで、私にも幾らかの貯へがありましたので、それを資本に小商ひを始めました。商ひといつても子供相手の三文菓子屋で、家の方は女房にまかせ、自分は車をひいて大道商ひをいたしました。しかし何としても子供相手のことですから、十五銭の元で五十銭になるとしても、雨降りや休みになり、殊に食べ物あきなひのことですから、折角仕込んだものが、お天気次第ですつかり無駄になつてしまふことがたび／＼あつたりして、どう働いてみたところが暮しのたちやうがありませんでした。そんなわけで、幾らかあつた貯へもみんな資本にくはれてしまつて、たう／＼一文なしになつてしまひました。そこで女房が「かうしてこのまゝ二人一緒にゐては、しまひには乞食にでもなるほかはない。私は自分で自分の身の始末をつけるから、あんたも自分だけのことを考へてください」といひますので、十年つれそつた女房とも別れることになりました。女房は出て行く、あとは私一人になつてしまひましたので、近所に住んでゐた小林さんといふ人

の世話で、今から八年前にこちらへ入院させてもらふことになりました。實際、生れて物心ついて以來苦勞のしつゞけで、少しもよいことのなかつた私にとつては、養老院はまことにありがたいところでした。これこそ阿彌陀さまのお救ひだと、心からありがたく思つてをります。幸ひ體だけは丈夫ですから、こちらに御厄介になつてゐても、いろ／＼仕事をさせていたゞいてをります。」

老人の話はこれで一先づ終りを告げたのであつたが、先妻が亡くなつた時によそへやつた二番目の娘は今どうしてゐるのか、また入院する前に別れた後妻は今どこにゐるのかとの記者の問に對して、老人はまた次の如く語り續けるのであつた。「よそへやつた娘の方は、何でも神田あたりの活版屋へ嫁いで、相當に暮してゐるといふことは風のたよりできてゐますが、一旦よそへやつてしまつたものに今更たよらうなどとは思ひません。それから、八年前に別れた後妻の方は、その後どこをどう暮してゐたのか知りませんが、不思議なことに、今年の三月、こちらへ御厄介になることになりました。大變身體も弱つてゐるので、今は病院の方で療養して

をります。身體さへ丈夫なら、女房も何か仕事をさせていたゞけるのですが、病人では何することも出来ません。それ故、私は自分で働いていたゞいたお小遣ひの半分を女房にやつてをります。」

あゝ、何といふ善良さであらう。記者は田中老人の安穩をひたすらに願ふものである。

その二

目こそ爛れてゐて良くは見えないらしかつたが、耳は良くて、こちらの言ふことを完全に聞きとることが出来、物を言ふにもはきくして、少しもぼけたところがない。全體にがつしりした體格で、おまけに見事な布袋腹の持主である。それが今年八十四歳の竹吉留吉老人である。

「安政二年一月二日、淺草區田中町に生れました。親が髮結を渡世してゐましたので、私もそれにならつて理髮屋をやつてをりました。親父の頃は結髮と斬髮と

つり變りでした、最初はちよんまげばかり結つてをりましたが、私が二十歳の頃、親父が出入りのお屋敷にゐた理髮師から斬髮をならつてきて、髮結のかたはら斬髮もやるやうになりました。そんなわけで、私も自然斬髮をならひまして、職人たちと一緒に家で働いてをりました。昔からこの商賣で藏を建てた人はあまりないやうであります、私の親父も御多聞にもれない方で、たゞ職を授けてくれただけで、別に何も残してはくれませんでした。私にはたゞ一人の姉がりましたが、その人も縁づいた先で亡くなつてしまひました。親たちに死にわかれてからは家内と二人で暮りましたが、どうしたわけか子供は一人も出来ませんでした。家業の方も一時は職人を二三人おいて相當にやつてをりましたが、その頃は今とちがつて理髮料も非常に安く、一人一錢などといふ馬鹿げた相場もありまして、いくら稼いでも追つきませんでした。そのうちに家内が亡くなりました。丁度私が五十歳の時でした。全くの一人になつてしまひましたが、それでも十五年の間、何うか斯うか家業を續けてまゐりました。ところが、運悪く道路改正にかゝつて店をひき拂はなければな

らなくなりしました。しかし、私も既に六十六歳の老人ではあり、後をつぐべき子や孫もありませんので、このさき理髪家業を續けて行くことも困難でありました。そこで商賣の方は断念して、よそへ勤め奉公することに決心いたしました。がつたことには貧乏世帯のがらくたの始末がつきません。家を一軒借りるだけの力はなし、間借りしたのではそれをおくところがないので、結局、お屋敷のやうなところの小使にでもなつて、そこへ住込ませてもらふほかないと思ひ、いろいろ探してやつと或るお屋敷の小使に住込むことになりました。年はとつてゐても、その頃はまだ丈夫でしたから、自分ではいくらでも働くつもりでをりましたが、世間さまはさうは考へてくれないで、折角おちついたお屋敷も、たゞ年をとりすぎてゐるといふ理由で断られ、あちらへ二年、こちらへ三年といふやうに轉々として勤めあるいてをりましたが、しまひには何處へ行つても断られるばかりでした。そんなわけでは何處にもおちつくところがなくて困つてをりましたところ、青山の善光寺といふ尼寺の方丈様のお世話で、昭和二年十二月にこちらへ御厄介になることになりました。

た。入院後も身體の丈夫な間はいろいろ働かせていたゞきましたが、只今では神経痛で坐ることが出来なくなりましたので、何もしないで遊ばせていたゞいてをります。」

なほ今の境涯にゐて、最も楽しく感ずることは何かときけば、

「もはや慾とはなれた生活ですから、これといつて欲しいものもなく、また欲しいと思つても、それが成就すべき境涯でもありません。たゞ残念に思ふのは、神経痛のため朝夕のおつとめにまゐることが出来ないことであります。それから、慾がないと申しましても、お食事にお魚をつけていたゞいた時や、お小遣ひをいたゞく時は何よりもうれしいと思ひます。」

その三

最後にあつたのは坂田いわといふ七十歳の女の老人であつた。見たところ萎びた瘦せぎすのおばあさんであつたが、そのきかぬきの目つきと達者な口のきゝ方とか

ら推して、これはたゞものではないと思はれた。すらくとしやべる東京辯のあひま／＼に、ちよい／＼關西辯がまじつて来る。おばあさんは元氣に語り出した。「生れは兵庫縣三原郡沼島村で、十八歳まで家にをりました。村は漁場で、私の家も網を引いて渡世してをりました。その地方の習慣で、年頃になると娘は必ず二十五里ほど隔つた大阪へ奉公に出ることになつてをりましたので、私も十八の時大阪へ出ました。これは縁組みの用意に、行儀作法や家の中の仕事をみ習ふためでありました。大阪へ出て私が最初に奉公したのは米屋で酒も賣り印紙も賣る店でしたが私はその女中として三年ばかり奉公してをりました。それからまた別の家へ變つて奉公してゐると、故郷の方から頻りに歸つて来いといつて来るので、一時かへることになりました。その頃はもう私も二十三になつてをりました。それ故、親たちとしては、無論のこと、私を何處かへ嫁にやらうと考へてゐたに相違なかつたのでしたが、一旦にぎやかな大阪で暮しつけた私には、どうしても淋しい田舎にひつこまうといふ氣にはなれなかつたので、間もなく親たちには内證で神戸へ逃げて出

ました。そして神戸で二年あまり奉公してから、また大阪へ出ました。大阪には母の親戚がありましたので、そこに暫く厄介になつてゐましたが、間もなく他家へ奉公に出ました。さうしてゐるうちに、或るてづるがあつて東京へ出ることになりました。東京には吉原といふ遊廓があつて、そこで働けば大變お金になるといふ話でした。その頃、京町二丁目にあつた或る大きな店にやとはれて、そこで二階廻しといふのを勤めることになりました。普通やりてといふのと同じことです。話にきいただけあつて、非常にいそがしい仕事で、勤めは勿論夜でしたが、その代りみいりも可なりありました。そのうちに、同じ吉原で番頭を勤めてゐた人と一緒にになり、夫婦共稼ぎで暮しましたが、子供はたうとう出来ずにしまひました。すると、私が吉原へ来て丁度二十五年になつた年に、あの大地震で主人の店は全滅になつてしまひました。元來私の夫といふのは信州で足袋屋をやつてゐた人なので、別にすることもなかつたところから、震災後の吉原で足袋を賣ることになり、夫と二人かはる／＼大道へ出て足袋の商ひをいたしましたが、なかく儲かるどころではなくて、

翌年の三月頃やめてしまひました。そのうちに、かね／＼願ひ出てあつた私の鑑札
 がありましたので、私はまた吉原で働くことになりました。今度は前のよりも小
 な店でしたが、そこで三年はたりました。夫の方は交番の近くに壽司屋を開業し
 て、職人などおいて盛んにやつてみましたが、場所が交番に近いのが悪かつたのか
 少しも繁昌いたしませんでした。それからまた外へ出て足袋屋をやり、更に今度は
 吉原土手で銘酒屋をやつたりしましたが、どうもうまくいきませんでした。その頃、
 夫は震災の翌年からおこり始めた中氣がますます／＼ひどくなつて、その方の看病も大
 抵ではありませんでしたので、私も勤めをやめることになり、たゞ時々臨時にやと
 はれて行く位になりました。吉原に勤めてゐる間は可なりよいお金にもなりました
 が、夫が酒のみだつたものですから、幾ら働いてもみんなつかはれてしまひました。
 そんなわけで、今となつては貯へもなく、病人の夫をかへて困つてゐるのに、ま
 あ何といふ不幸でせう、今度は私が病氣になつて、いくらお医者にかゝつてもなほ
 りません。たうとう和泉橋の三井慈善病院へ行つて診察してもらふことになり、診

察の結果は内地には滅多にないヒラリヤといふ病氣で、是非とも入院しなくてはな
 らないといふことになりました。兎に角入院して治療していただきましたが、重病
 のこととてなか／＼よくなりません。そのうちに先生の方から、「このまゝ入院して
 るても家で治療しても同じことだから、退院した方が宜しい。菌はまだとれきれな
 いが、非常に弱つてゐるから、これ以上病氣が悪くなるやうなことはない。處方を
 あげるから薬を買つてのむがい。」とおつしやるので、早速退院することになり
 ました。その時夫は自分の甥のところへ厄介になつてゐましたので、私もそこにお
 ちつくことになりましたが、何としても病人二人を世話することは一通りのことでは
 ありません。また私たちとしても氣がおけてなりませんでした。ところが或る日
 のこと、私はフト養老院のことを思ひ出しました。といふのは、私たちがまだ吉原
 で働いてゐる時分のこと、留守番にたのんだばあやが、自分は瀧野川の養老院に
 たことがあるといつて、中の様子などを話してきかせたことがあつたのでした。そ
 の頃は何の氣なしに聞いたことでしたが、今となつてはもう何にかへがたい私た

ちのよりどころとなりました。私の決心はつききました。そこで夫にも話して、たとひ入院した翌日に死ぬやうなことがあつても、かうして厄介になつてゐるよりも増しだからといつて、中氣で動けない夫をつれてこちらへお願ひにあげました。それは昭和四年のことで、間もなく家庭寮へ入れていたゞきました。はひつてみて私の驚いたことは、養老院とはこんなにも結構なところかと思つたことであります。ばあやに聞いただけで、いろ／＼想像してゐたのとはすつかり違つてゐて、第一に皆さんが親切にお世話してくださり、どこからどこまできれいで立派で、何一つ不自由なところがありません。おかげで私も入院してから気分がさつぱりして、身体の具合もよくなり、心配した病氣も一枚一枚薄皮をはぐやうによくなつて、洗濯も出来ればお掃除もするといふやうになりました。これこそ眞に阿彌陀さまのおかげだと心からありがたく思つてをります。かうして私たちは最早や十年も御厄介になつてをりますが、夫の病氣がよくないので、三ヶ月ほど前に家庭寮をひきはらひ、夫は病院の方に移され、私は集團寮の方へ移つて皆さんと一緒に暮してをります。

人によつてはすることがなくて退屈してゐる方もあるやうですが、私など病夫の看護のためそんなことはありません。」

感想

さて三人の老人の語るところによつても察することが出来るやうに、これら老人の多くは、いづれも此處に收容される前までは、何とかして他人の厄介になるまいとして、百方自立の途を講じたものであることは明かであつて、その不幸の原因が最初から彼れら自身にあつて、その當然の歸結として今日の境涯をまねいたものと思はれるやうなのは殆んどない。反對に彼れらの多くは善良であり、正直であり、勤勉であつて、この世の中へは寧ろ善根をこそ積み、害毒など流して来たものでは決してない。然るに、世間にはさうした實狀に氣づかずして、一概にその原因を彼れら自身の缺陷に歸し、「どうせ養老院などに居るものにロクな人間はない。」といつて、これを自業自得として顧みようとしない人の多いのは遺憾に堪へない次第で

ある。ありていに言へば、彼れら老人の多くは、生來、善良であり、正直であつたればこそ不遇におちいつたのであつて、もつと猾く世の中を渡ることを知つてゐたならば、彼れらもまた今日の境涯はまねかなかつたであらうとさへ思はれる。

言ふまでもなく、この世の中は縦にも横にもつながつてゐる一つの網のやうなものである。されば彼れら老人が、たとひ如何ほど無力無能な人間であつたとしても、この世の中の一員として活動してゐた以上は、必ずやその過去においては、何等かの善き波紋をこの世の中を描いて來たに相違なく、また退いて彼れら今日の境涯から考へてみても、その過去において描いた彼れらの波紋は、必ずや今日および明日の世の中に對して、何らかの善き結果を齎らしてゐるに相違ない。言ひかへれば、彼れらもまた今日の世の中に對する功勞者の一人であつて、その功勞にむくいるのは、社會一般の義務であると言はねばなるまい。こゝに養老院存立の理由が十分にある。

ところで今この東京養老院を參觀して深く感じたことは、その全體にみなぎる空

氣のいかにもなごやかな點である。その規模や建物の構造からいへば、必ずしも立派であるとは言へないかも知れないが、その老人たちに對する當事者の寛大な態度と老人たちの團欒の様子は、恐らく他ではみられないところであらうと思はれる。この寛大と團欒とは、然らばどこから生れるかといへば、これこそは、實に、この養老院存立の精神であり、根幹である佛教主義より結果するものであつて、當事者の老人をみることに、恰も衆生の恩にむくいるが如くであり、老人たちはまた彼れらが今日の平安を得られたのは、これ偏へに阿彌陀様のお救ひによるものとして、互ひに尊重慈愛してゐるからにほかならない。

昨日は御多忙中お伺ひ致しまして、大變お世話様になりました。あいにく持合せなく、寄附も名のみにて誠に申譯ありませんでした。残らず見せていたとき嬉しうございました。何もかも至れり盡せり、厚いお手當の行きとどいておますのには實に驚きました。有り難いものだと深く心に感じ、私もこれから無駄をはぶいて多少なりとも寄附を致したいと思ひます。

これは數日前に參觀に來た一女性からの禮狀であるが、始めてこゝへ來て老人たちの生活を見たものは、誰しも同様な感じをいだかれることと思ふ。養老院といへば何だかむさくるしい鼻もちならぬ所のやうに思つてゐる人も多いことと思ふが、少くともこゝの養老院では、さうした感じは微塵も受けさせられないことは確かである。

跋に代へて

—東京養老院の一日—

東京養老院理事
兼法律顧問

川瀬專之助

豫てからの念願であつたので、私は裁判事件を一切九月以降に願つて、今夏八月から、東京養老院の經營のゴツを掴むべく、理事長木村玄俊師(傳通院貫主)、常務理事里見達雄師(現淨土宗執綱)の許諾を得て本院に入院することゝなつた。我儘な私には、果して何日間辛抱が出来るだらうかと、些か心懸りには思ひながら……ところが驚く勿れ、八月二十日頃迄滞在辛抱さしていただいた……私は勇敢?にも八月四日駒込驛下車、本院にゆく。主事の山田得立師が欣然として迎へられる。先づ恩賜講堂に入つて、御本尊の御前に額いて、御挨拶を申上げて、今夜から宿舎に當てられた部屋に入る。

院の事務室を視察してから、まづ炊事場と物置とを視る。何時もながら小ザツパリと清潔に片附いてゐるのに感心して、これなら安神して御食事がいただける、安堵の胸を撫で下す（今から考へると、勿體ないことだと自ら恥ぢてゐる次第です）。

本院收容者中の健康者の居室集團を一巡する。各室二十五疊敷位の中に、四、五人位づゝ樂々と暮してゐる。廊下も一間半位の幅があるのですから、のび／＼としてゐます。どの人々の顔を見ても、私共の職務上平生から見えてゐる様な、険しい不安に満ちた顔は一つも見えない。そして或者は雑誌を讀み、或者は之に耳を傾け、或者は端然と、淨土宗の經文を讀誦してゐる。

こゝ許りは、浮世の風が吹き入らぬと見えて、總てが寺院のやうな落付きと平和とが支配してゐる……衣食の大事も、その上に醫療の心配も無いからであらう……思ひなしか、老人達の人相も甚だよろしい。しかし小さいと雖も一社會だ。足らぬ人達の形造る社會に、心の苦惱なしとは云へまい。さあ、これから皆さんと一緒に

生活をして、老人たちが何を考へ、何を希望してゐるかを體驗するであらう。

二

院經營の病院……養老院入院者總數の三分の一強は老衰病者である……吉田看護婦長の案内で一巡する。

診察室、齒科治療室、藥局、大病室三室等總て清潔に且整然と保たれてゐる。病院を經營してゐる私の友人が、模範的だときへ賞讃して呉れた位である。

主任醫師二名、片平庸吉、仙波昌秋の兩氏は共に嘗て軍醫をやり且開業醫の經驗を持ち、本事業に理解を持つ立派な國手である。藥劑師一名、婦長を始め若き看護婦十五名、雑役夫二名、その命を奉じて活動してゐる。

一番重い患者のゐる病室を見舞ふ。殆んど總てが老病の部類に屬するもので、其中には中氣の患者も數多く交つてゐる。が老人のせい、か、まことに靜かにスヤ／＼とベッドに横つてゐる。その顔を覗くと、病苦と云はんよりは寧ろ世路辛酸の苦惱のシワが刻まれてゐるのみである。眞夏の頃ではあるが、南風は充分に吹き通つて

る。

輕症患者室を見る。ここは、疊の上にベッドが敷かれてゐる。そここゝで雜誌や笑聲が聴える。雜誌『キング』などを見てゐるものもあり、中には聖書を靜かに讀んでゐるものもある、私を知つてゐる人々が笑顔で會釋をしてゐる。廊下に一老男子が眞裸體で大手を振つて歩いてゐる。若い看護婦が頻りに之を制してゐる。この人は老衰で頭がボケて、看護婦が汚れを清めてゐるうちに、眞裸體で平然と飛び出して、若い看護婦を困らせてゐる一風景だ。

療養室を見るとこれは病後療養する者のゐる部屋である。ベッドと雜誌類と特に食器類が眼につく。年老いると食物を特に賞美するといえる。

全院異状なし。安神して自室に歸り、穂積重遠博士から頂戴した故穂積兩博士の御進講録を拜讀して、十時就寢。

三

朝五時床を蹴つて起きる。二階の自室から眺めると、なんと全院既に眼醒めて、

朝霧の中を老人達は室の内外を清掃してゐる。家で毎朝若い者を呼びつけてゐる私には、むしろ不思議な風景だ。うがひ手水をつかふ。

讀者諸君よ、院へいつでも來て見て下さい。室内は勿論廊下でも庭園でも、常に小ザツバリと清掃されてゐます。塵つ葉一つあるだらうかと思はれる位です。

病院を一巡して、今朝は、家庭寮に行く。省線駒込驛近傍の路線を超えたところ十數棟の長屋建がある。其の中には夫婦者のゐるところあり、軍事救護關係者のゐるところあり、ここはもう既に掃除を終へたところである。知り合の老婦人が『先生こちらを見て下さい』と云ふ、見ると庭一面に朝顔の花が、それはく見事に咲き亂れてゐる。ここも亦老人の平和郷だ。響いてくるものは省線電車の響ばかり、憂き世の響は少しも出入してゐない。

午前六時頃自室に歸つて、眺めるともなく眺めてゐると、體操の先生江木さんの號令につれて、一老人はラジオ體操をやつてゐる。

六時二十分を過ぎると、皆さんの御家庭に毎月御寄附を頂戴にうかがふ外務員の

人々が、ポツ／＼集合して出發の用意を始める。集金に出る前には必ず恩賜講堂の御本尊の御前で、精神を潔めてから、皆さんの御宅にうかがふ職務につくのです。六時半には、大太鼓が鳴る。講堂に集れとの合圖である。御本尊様の御前に座ると、そこには毎朝入院者に依つて御供物がされてゐる。指導者が鐘を叩いて、御念佛の指揮をとる。入院者は病者を除いては全部、毎日朝晩三十分の御勤めに参加することになつてゐる。其こと以外は出入も一切自由になつてゐる。私も其仲間に入れていたゞいて、一文不知の愚鈍の身となつて、一心に念佛を唱へる。念佛約二十分の後、法然上人の一枚起請文を一同で暗誦する。

一枚起請文には

『タダ、往生極樂ノタメニハ、南無阿彌陀佛ト申シテ疑ヒナク往生スルゾトオモ

ヒトリテ申ス外ニハ、別ノ仔細候ハズ』

『念佛ヲ信ゼン人ハ、タトヒ一代ノ法ヲヨクヨク、學ストモ、一文不知ノ愚鈍ノ身ニナシテ、尼入道ノ無智ノトモガラニ同ジウシテ、智者ノフルマヒヲセズシ

テ、タダ一向ニ念佛スベシ』
 といふ、淨土宗の安心起行の極意が簡明に書かれてある唯一無二の名文章である。一同は一向に念佛した後、右の起請文を暗誦する。終はると夫々の部屋に歸つて食事を攝る。私も、皆と一緒にの食事をいただいた後、與へられた院務を見る。

四

院の主事の山田得立師から、勅修御傳法然上人傳をいただいた。私の讀んだ多數の書物のうち、此の御傳位讀みごたへのあつた傳記は少い。何故私たちにモット早く、此の勅修御傳を讀ませるやうな宣傳して呉れなかつたのかと、苦情を申立なくなる位の立派な傳記である。その第四十五章のところに、左の御法語がある。

『現世ヲスグベキヤウハ、念佛ノ申サレンカタニヨリテ、スグベシ、念佛ノサハリニナリヌベカラシム事ヲバ、イトヒスツベシ』

『ヒトリコモリ居テ、申サレズバ、同行ト共行シテ申スベシ。』

共行シテ申サレズバ、一人コモリ居テ申スベシ。

衣食カナハズシテ申サレズバ、他人ニタスケラレテ申スベシ云々

これは法然上人の御法語の一節である。

本院には『衣食カナハズシテ申サレザル』六十歳以上の老衰廢者が三百有餘人收容されてゐます。今茲に之等の老人は『他人ニタスケラレテ』、皆さんの御蔭によつて念佛を申し、嘗ては絶望の深淵に臨んでゐた身が、今では彼岸淨土を欣求し得るやうになりつゝあります。此不安焦燥の非常時局の中に在りながら佛陀の慈懷に抱かれてゐるやうな平和な生活をさしていただいでゐるのであります。誠に眞に有難い極みであります。

私は嘗て養老事業につき聽いた當初には、養老院に收容される様な者は、自墮落の生活をしたヤクザ者だらうと考へてゐましたところが、本院の救護部に命じて、入院者の經歷を調査せしめ、且つ自ら直接してみても、又他の養老事業の調査書等を取寄せて、研究をして見ると、九十パーセント以上が、明治以來の烈しい社會状態の進歩と文化の變遷との爲めと、不幸にして其配偶者其子孫の死滅した爲め又は無

かの爲めに、遂に六十年以上の長い歲月の間の苦闘功を成さず收容せられた憐むべき薄倖の人々であることを知つて、今更らながら驚きました。

『社會事業は慈善事業とのみは云へない。主として社會連帶の思想に基くものである』といふ、社會事業の根本思想が、現實にマザマザと證明せられてゐるのを見て驚いて此事業を見直した事であつた。

我等は生きる限り、出來得るだけ社會奉仕をせねばならない。これが大乘佛教の根本精神である。それと同時に、我等は日本國民として、其同胞中に不幸なる薄倖なる人々、特に老衰廢者のゐる限りは、社會連帶の思想、同胞相愛の大精神を以て、之を救済するの崇高なる義務……佛陀の慈悲とも云ふべき……を自覺せねばならないと思ふ。

皆さんが本院に對し毎月十錢以上の御寄附金又は其修得せられたる技術又は藝術に依る御奉仕（本院では例へば市中の理髮師の方から理髮の奉仕を又有名な三浦環女史から聲樂を又長唄協會の副會長芳村伊四郎師御社中の方々及本院に直接間接に

關係のある女流の方々から長唄の演奏、舞踊等を演じていたゞいて、老人達を慰めていただきました。の如き慈善敬老の奉仕的御行動は、獨り大乘精神の表現であり人道主義の實行であり、同胞相愛の、所謂社會連帶の義務の履行であるのみならず、我邦古來からの傳統精神であり根本精神である敬老尊祖の淳風美俗をも併せて涵養することゝなるのであります。私共は常にかゝる大方の諸君に對し絶大なる尊敬を拂ひ、禮拜合掌せざるを得ませぬ。

明治節の芽出度き日に、近衛首相の宣言せられた如く、日本國民は東亞六億の民を救済する重大なる使命を擔つてゐるのでありますから、私共は日本國民全體に對して、かかる尊祖敬老、同胞相愛の美德を愈々積んで日本の淳風美俗を修養強化し、以て國礎を益々鞏固にしていたゞくやう奮勵努力致したいと念願致してをります。

終りに本書編纂の任に當られたる伊藤孝一、塚越菊治兩氏の御勞苦に對し深く感謝の意を表するものである。(昭和十三年十一月三日記)

非賣品

昭和十三年十一月二十五日印刷
昭和十三年十二月八日發行

老 養

(要概院老養京東)

發行兼編輯者 東京市瀧野川區中里町一六〇
東京養老院理事長 木村玄俊

印刷所 東京市京橋區西八丁堀四ノ八
昭文社印刷所

印刷者 東京市京橋區西八丁堀四ノ八
渡邊正雄

東京市瀧野川區中里町一六〇

發行所 東京養老院

電話駒込(82)〇〇三七四

387
339

